
東方紅葉記

夜斗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方紅葉記

【Nコード】

N3787P

【作者名】

夜斗

【あらすじ】

犬走椛はいつものように友人の河城にとりと将棋を楽しんでいたところが突然、上司である射命丸文から妖怪の山に何者かが侵入したとの情報を知らされる。

そして半ば強引に搜索を命じられると、椛は足早に山へと向かう。

そして見つけたのは、一人の人間の少女だった。

犬走椛とオリジナルキャラがメインのお話。

もちろんその他のキャラも多数登場します。
時間軸は風神録まで。
更新時間は夜になりそうです。

第一話（前書き）

紅葉記、というタイトルは単純に秋に思いついた作品だからです
個人的な見解が多く含まれているので、嫌悪などを感じさせてしま
った場合はすいません；

東方二次創作の処女作です

生温かい目で見守っていてください（笑）

ご指摘等、ございましたらいつでも書き込んでください

第一話

「なあもみじ椀？　いつつも将棋するのはかまわないのだが」
「うん？」

駒を進めた少女が目の前の友人を見る。

椀と呼ばれた少女は小さく返事しながら、じいっと盤を見つめていた。

「上の方にばれたりはしないのか？」

上司にサボってるぞ〜とか言われたりするんじゃないか？」

「ちよつとした息抜きぐらい大丈夫です。私はいつも真面目に任務を全うしてますしね。……それよりにとり？」

「む？」

にとりと呼ばれた、レインコート姿の少女が首をかしげる。

椀は小さく微笑んで、

「ほい、王手」

「む……？　ひゅい!？」

にとりは妙な声をあげて自分の王将の前の駒をにらみつけてから……

「ま、ままま、待った!」

「ふふ、待った無しですよにとり。今回は私の晩ごはんがかかってますからね」

椀はちらと、そばに置いてあるカゴに目をやる。

中には川でとれた新鮮な魚がぴちぴちと跳ねている。

今日の勝負は、この魚を賭けての真剣勝負だった。

「今日は私の勝ちってことで」

「む、無念……」

「えへへ。それじゃあいいただきます」

椀はにつこり微笑むと魚の入ったカゴを手にとる。

そして一度大きく伸びをしてからゆっくりと立ち上がった。

「それじゃ、そろそろ任務に戻ろっかな。」

あんまりサボってる为先輩に怒られそうだし」

「ん〜そだな。サボってるのばれたら音速で突っ込んできそうだしな」

「なんてたって、幻想郷最速の先輩ですからね……」

「いやあ、幻想郷一速くてもまけに才色兼備な先輩だなんて……褒めてもなにもでませんよ?」

「へ……? うわああ!？」

いつの間にか、椛の真横に黒髪の少女が立っていた。

「あ、ああ文先輩!? い、いつの間にきたんですか!？」

「ついさっきよ。しかし毎度毎度、椛はこんな河童と将棋なんてしていて楽しいんですか?」

「こんな、つてのは失礼だろ! てかそんなに褒めちぎってもいいだろ!？」

にとりが怒って声を荒げるが、文はそれを無視して、

「そんなことより椛、いますぐ任務にもどりなさい」

「え、なにかあったんですか……?」

文は少しだけ顔をしかめてから言った。

「人間が、この山に侵入したそうです。あなたはそれを大至急搜索するようにと、大天狗様からの命令よ」

「に、人間……?」

この妖怪の山に人間が侵入した?

どうして? 何のために?

深く思考する間もなく文が続ける。

「ぐずぐずしてないでさっさといきなさい! 見つけ次第、すぐに私に報告すること! わかった!？」

「は、はい!」

その剣幕に気押され、椛は慌てふためきながら飛んでいった。

「……なあ文? ホントに人間がこの山に侵入したのか?」

「ええ。目撃情報がこちらに多数寄せつけれていますし。大天狗様はさつさと排除しろとのことですが……」

「ですが？」

すると文は、悪戯っぽく笑みを浮かべてカメラを取り出した。

「良い記事になりそうですよ？ 妖怪の山に迷いこんだ人間！ その運命やいかに！ ってね」

「ああ、そういうこと……」

にとりは深いため息をついた。

「人間……か。迷いこんだ人間ってどんなヤツなんだろうな？」

「さあ？ とりあえず今は椀の連絡を待ちましょうかね。にとりさん、お茶」

「ってここで待つのかよ！？ ……はあ、しょうがないなあ」

言い返すのもめんどくさくなつたにとりは、渋々お茶を用意する。

（椀も大変だよなあ……）

そして再び大きなため息をついてから、にとりは友の向かった山を見上げた。

第二話（前書き）

言われるがままに妖怪の山の搜索を始めた椋。

広い山の中をあてもなく探していると、紅葉のストラップがついたカメラを見つける。

そして、その持ち主と思われる人間が平野で倒れているのを椋は見た。

第二話

「さて、侵入した人間を探すのはいいけど……」

椛は高い木の枝に立って辺りを見回した。

妖怪の山、と一口にいつてもその実とても大きな山である。

この広い空間を椛一人で搜索するのはとても困難で……

「せめてなにか情報が欲しかったなあ」

あてもなく探すのは本当に骨が折れるだろう。

ため息つきつつも、椛は枝から枝へと飛び移る。

木々の隙間を獣のような速さで駆け抜ける。

彼女も天狗のはしくれ。

身体能力は当然高い。

これぐらいのこと造作もないのだ。

「……ん？」

ふと、椛はなにかを見つけた。

高い木の枝から降りて、それを確認する。

「これは……」

見覚えのある、小さな黒い箱。

よく先輩が使う写真を撮るための道具、カメラだ。

「先輩が落とした……わけないか。侵入した人間の持ちものなのかな」

それをひょいと拾いあげるてまじまじと見つめる。

カメラには紅葉をあしらったストラップがついていた。

「ここで落としたってことは、まだこの近くにいます……」

辺りを一度見まわして、その後再び木の枝へと飛び移る。

すると、椛の目が細まった。

少し先の開けた場所で、誰かが倒れている。

恐らく、この山に侵入した人間だろう。

ようやく見つけることができた。

「……一応、武器を構えておきましょうか」
腰に収めていた片刃の剣と盾を握りつつ、桜は飛び出した。

第三話（前書き）

倒れていたのは、人間の少女だった。

柊は恐る恐る接触。

その少女は柊に名乗ると、また先ほどのように倒れてしまう。

柊はしかたなく少女を保護し、文たちが待つ大滝へと引き返したのだった。

第三話

草むらのかげに身を潜めつつ、ゆっくりと倒れている人間へと近づく椀。

「急に襲われたりしても、すぐに対処できるように……」
無意識に刀を握りしめる手に力が入る。

いつでも戦えるようにと全身に緊張をはしらせる。
そして一歩一歩と、人間へと近づいていく。
やがて、その人間の表情が見えてきて……

椀は驚いた。

「女……の子？」

その人間というのは少女だった。

眠っているのか、気絶しているのか、少女は倒れたまま動く気配がない。

椀は注意深く少女を観察する。

肩ほどもで伸びた黒い髪。

端正な、しかしどこか幼さが残る容姿。

そして紺色の、椀が今まで見たことのない変わった衣服。

「お、おいおまえ！ い、生きてる……のか？」

恐る恐る声をかけてみるが、やはり少女は倒れたまま。
不安になった椀は少女のそばまで近づいて、

「お、おい……」

頭を指で突つついたり、揺さぶってみたり……
しかし反応はまったくない。

「どうしよ……死んでる人間なんてはじめてだし……」

「う、うう……ん」

「のわぁ!？」

ちいさなうめき声に、椀は驚いて後方へと飛び退いた。

「ふ、不意打ちとは卑怯な!？ おとなしく……?」

少女が少し、ほんの少しだけ体を起こした。

椀は刀を構えながら少女を見据えて、

「……？ 殺気もなにもかんじない……」

目の前の少女はまるで寝起きの子猫のように、ぼんやりとまぶたをあけてキョロキョロとあたりを見回すと、

「ここ……どこ」

呟いた。

そしてぐるりと首を椀に向ける。

「こ、ここは妖怪の山です。あなた、な、何者なんです……か？」
微妙に警戒しつつ、椀が訊ねる。

少女はあいかわらずぼんやりとした目のまま、ゆっくりと口を開いた。

「……時雨、葉月」

「時雨葉月、ですか。ところであなたいったいどうしてこの山に……」

……って、もしもし？」

名前を名乗った途端に少女、葉月はぱたんと倒れてしまった。
しゃべることに力を使い果たしたのだろうか？

「……しかたありません。とりあえず保護しましょうか」

椀は少女を肩にかつぐと、手近な木の上へと飛んだ。

一度方角を確かめてから強く枝を蹴る。

そうしてまた木から木へと移りながら、椀は文たちが待つ大滝へと向かった。

第三話（後書き）

更新は今のところ不定期ですが、書けたら一日一話ぐらいのハイペースで頑張りたいと思っています。

しかしまあ、もちろんお話を思いつかなかったりすることもありますので、その時はご勘弁を；

基本、毎週一話を目標として作業することにします。

第四話（前書き）

声が聞こえる。

何者かが、彼女のまわりで話をしている。

彼女はそれにこたえようとするが、なぜか体が思うように動かなかった。

少しずつ力をいれて、全身の感覚を呼びおこす。

そして……彼女は目覚めた。

第四話

声が、聞こえる。

誰かが、私の近くで話をしている。

大丈夫ですか？ とか。

死んでるの？ とか。

変わった服ですね？ とか。

大丈夫、と答えようとしても声が出なかった。

死んでないよ、と動こうとしても力が入らなかった。

最後のは…… どういう意味なのかよくわからなかったけれど。

とにかく私は、一生懸命体を動かそうとした。

が、結果は相変わらず。

どうしてだろう？

もう死んでしまったのだろうか？

声が出ないのも、声を出す体が無いからだろうか？

でも、指の感触とかそういう感覚はある。

どうして体が動かないんだろう？

……動かない？

というか、私は動かそうとしただろうか？

力いれただろうか？

落ち着いて、まずは深呼吸。

息ができてるんだ。

死んでるってことはないだろう。

まずは足でも、腕でもいい。

とにかく体を動かして。

感覚を呼びおこして、耳を澄まして、目をひらいて、そして……

光を、感じた。

第四話（後書き）

今回は少し短めです；

第五話（前書き）

目が覚めるとそこは見知らぬ場所、見知らぬ世界。

そして初めて目にした、大滝と紅葉の幻想的な景色。

不安と好奇心に包まれながら、葉月は白髪の少女と出会う。

第五話

気がつくと、彼女は見知らぬ場所で寝ていた。
真っ先に見えた質素な天井。

和風な室内。

全然見覚えのない場所だ。

どうしてここにいるのだろうか……？

あれこれと思考を巡らせていると、どこから轟々と音が響いてるのに気づいた。

これは滝……の音だろうか？

彼女は気になって起き上がる。

不思議と体はすんなりと動いてくれた。

少しふらつくが、歩けないというわけではない。

そのまま立ち上がって、正面にある窓をあけてみた。

「うわぁ……」

目の前には、巨大な滝が激しく水しぶきをあげながら流れ落ちていた。

今まで見たこともないほど大きく、そしてとても……美しかった。
流れ落ちる滝とともに舞い踊る、燃えるように真っ赤に色づいた紅葉。
まるで秋が空から舞い降りてくるような、とても幻想的な風景だった。

この風景を、ぜひとも収めたい。

そう思っただけはポケットに手を入れ……

「……あれ？」

ない。

カメラがなかった。

いつも制服のポケットにしまっていたデジタルカメラがない。
もしかして、どこかに落としたのだろうか……？

「ど、どうしよう……あのカメラは私の大切な」

「お探し物はこれですか？」

すると後ろから突然声がきこえた。

振り返ってみると、そこには見知らぬ少女が立っていた。

少女、にしてはやや凛々しい顔立ち。

白を基調とした道着のような衣服、それと同じ白髪をなびかせ、腰には太刀を帯剣していた。

彼女と同じ年だろうか。

いやそれよりも気になったのは……

「……犬耳？」

「耳？ 探してるのは耳なのですか？」

不思議そうに首をかしげた少女には、まるで犬のような三角の耳がちゃんと立っていた。

時々ぱたぱたとさせる仕草がとてもかわいらしい。

なんかこう、もふもふしたいといつかなんというか……

しかしそんな妄想は、少女の持っていたものを見た瞬間消え失せた。忘れもしない、紅葉をあしらったストラップのついた……

「そ、そのカメラ！」

「やはりあなたの持ちものでしたか。……ですが」

少女は小さくうなずくと、なぜか腰の太刀に手をかけ、

「その前にまず事情聴取です。事次第によつてはあなたを斬らなければなりませんので」

「え、ええ！？ き、きき斬る！？ ちょ、私なんにも悪いことしてないよ！？」

「いえ、この山に侵入した時点で立派な犯罪者ですので。……さて葉月さん、どうしてこの山に？」

突然自分の名前を呼ばれて、葉月は驚いた。

「……なんで私の名前を知ってるの？」

「なんでって、さっき自分から名乗ったじゃないですか。覚えてませんか？ 平野の真ん中であなたは倒れていて……」

「ち、ちよつと待って……」

なにも、思い出せない。

私が倒れていたという平野も山も……

それ以前に、自分がなにをしていたのかも思いだせなかった。

思いだそうとすると、それを拒むように頭に激痛が走る。

「痛ッ……」

「ふむ……まだ起きたばかりのようですし、今は無理しないようにしてください。事情聴取はそれからでかまいませんので」

そう言うと言髪の少女は部屋を出ようとして、

「あ、あの！」

「……？　なんですか？」

「そ、その。ありがとうございます。助けてもらっちゃって……えつと」

「^{もみじ}桜、^{いぬぼし}です。犬走桜」

少女、桜は小さく微笑んでみせた。

「少ししたら食事を用意します。それまで、ゆっくり休んでくださいね」

「ありがとうございます……」

「いえ。それでは失礼します」

桜は一礼すると静かに退室した。

「事情聴取……か」

はたして、なんて答えればいいのかだろうか。

葉月はその答えを知らないのに。

「うう、緊張してきたな……」

それでも、あまり深く考えないようにするために葉月は目を閉じた。

「……え！　あの人が起きたんですか？　なんでそれを早く私に報告しないの！」

「おいおい、あの子は起きたばかりかだろ？　もう少し休ませてやれよ」

「ええい！ 河童はだまらっしゃい！ こういうのは速さが大事なんです！ 病み上がりだろうと死にかけだろうと私は迅速な取材をお！？」

「ちょ、誰かコイツ止めろ！？」
下は下で大騒ぎ。

その声を聞いて、葉月の胸の不安が少しずつ大きくなりはじめた。

第五話（後書き）

少し間が空いちゃいましたが第五話完成です。

前回と違って今回は長めの文章。

まだまだ拙い文章ですが、読んでいただければ幸いです。

……作者の日本語も怪しいんで、変なところを見つけたらビシバシ指摘しちゃってください；

第六話（前書き）

葉月が部屋で休んでいたその時。
文の抑えられぬ探究心を止めるべく、
椀とにとりは奮闘していた。

第六話

「離せ！ 私は取材にいくんだあ！ 離せ河童ゴルア！」

「も、椀い！？ こいつどうにかならんのかあ！？」

「先輩落ち着いて！？ そんなに焦らなくても彼女は逃げませんって」

「そんな根拠がどこにあるっていうのです！」

「だからおまえ落ち着けて！？」

暴れる文を、椀にとりが二人がかりでなんとか抑える。

「でも、あの子よく妖怪の山に侵入できたよな。天狗の警戒がただでさえ厳しいってのに」

「その天狗は恐らく将棋でもしながらサボっていたからにちがいないりません」

「わ、私のせいですかあ！？ そんなのひどいですよお……」
本気で涙目になる椀。

とはいえ、にとりと将棋をしていたのは拭いようのない事実。
文は鋭い目つきで椀をにらむと、

「あなたの任務はなんですか？ 椀？」

「よ、妖怪の山の哨戒……です」

「して、その哨戒とは？」

「し、哨戒とは、敵の侵入や襲撃にそなえ、その周囲を警戒しつつ見張ることです！」

「無い胸張って威張るんじゃないやありません。現にあの方の侵入を許してるじゃないですか」

「……ぐすん」

そろそろ涙がこぼれそうだ。

しかし侵入を許しているのもまた事実。

反論はできない。

「……それで、彼女の具合はどうでしたか？」

文が話題を切り替える。

椀は涙を腕で無理やり拭いてから報告する。

「起き上がったばかりで少々疲れているみたいですけど。もう少しすれば話もできると思います」

「なら、そろそろ取材……いえ、事情聴取しましょうか」

「面白そうだから私も行くぞ」

意気揚々と手帳とペンを取り出す文。

それに付き添う椀とにとり。

三人は葉月のいる二階の部屋へと向かった。

第七話（前書き）

いよいよ事情聴取の時がきた。

葉月は緊張しながらも、榎の上司である射命丸文の質問に正直に答える。

少し話題がそれてしまったその時、榎の友人であるにとりがあるものを見つけた。

それは葉月の、遠い昔の記憶を呼び覚ました。

第七話

足音が、ゆつくりと近付いてきた。

その音は葉月の部屋の前で止まって、

「椀です。よろしいですか？」

先ほどの少女の声が聞こえてきた。

「どうぞ」

ほんの少し間が空いてから、戸が開く。

「失礼します。葉月さん」

現れたのは椀と、その後ろには再び見知らぬ人たち。

レインコート姿の青い髪の少女と、活発そうな黒髪の少女。

「えっと、そちらは？」

「私の友人の河城にとりと、上司である射命丸文さんです」

「ども。清く正しい射命丸です！」

「か、河城にとり……だよね」

「にとりさんなに緊張してんですか？ 河童は人間の盟友なんですよ？」

「う？」

「い、いやだつて初対面だし……」

にとりと名乗った少女はひどく恥ずかしそうに頬をかいていた。

カツパは人間の盟友……？

葉月にはなんのこともいまいわからなかったが……

「さて、早速ですがいくつか質問をしたいのですがよろしいですか？」

清く正しいとアピールした文はすでにペンを片手に葉月の返事を待っていた。

「は、はいッ……」

いよいよ事情聴取。

葉月は緊張して声が少し上がってしまった。

「緊張しなくてもいいですよ。簡単なコトしか聞きませんので。で

はまず……」

一呼吸置いてから、文が言った。

「では、葉月さん。あなたは どうしてこの山に？」

「わ、わからないです……」

「わからない……？ 理由もなくこの山に入ったのですか？」

「その、気がついたら 椛さんに助けてもらっていて……それ以前のことを覚えていないんです」

「記憶喪失ってやつなのか？」

横からにとりが一言。

それに文は困ったようにうめいて、

「それは……困りましたね。明確な理由がないと面白い記事になりませんし……」

「記事？」

「いえ、こちらの話です。しかし……なにか思い出せませんか？どこから来たとか、なにか探しているとか、記憶の手がかりになりそうなものとか……」

「手がかり……」

必死に思いだそうとするが、なにも思い浮かばない。
手がかりになりそうなもの……？

「そうだ、カメラ……」

「椛さん。それを彼女に」

椛が先ほど葉月に見せた、紅葉をあしらったストラップ付きのカメラを手渡した。

「変わったカメラ……ですね。私の使ってるものと少し形状が違います」

「え、普通のデジタルカメラですけど……？」

「でじたるかめら？」

まるで初めて聞いたかのようにあやふやな発音で呟いた文。

取材よりも、葉月のカメラが気になりだした様子で、

「そのカメラ見せてください！」

「え、ええ……」

ひったくるようにして葉月のカメラを借りると、レンズを覗いたりシャッターのボタンに触れたり……

「おおー！ カッコイイー！ 欲しい！ これください！？」

「ちよ、先輩本題からずれてますよ！」

未知のカメラを手にしてテンションマックスな文をどうととなだめる椋。

その時、ふとカメラの小さなモニターに何かが映った。

「あ……」

「これは……？」

「写真のデータみたいだな。このカメラで撮影した画像がここに表示されているらしいぞ」

「む。さすが妖怪弾頭でエンジニアのにとりさん。機械にはお強いですねえ」

「見ればわかるだろこれくらい……ん？ これ、誰だ？」

にとりが一枚の写真に注目した。

大きな木の根元でたたずむ少女と老人の写真。

にとりが指差したのは、少女の隣で静かに微笑んでいる老人。

「これは葉月さんですかね？ だとしたら……」

文が葉月に視線を移すと、

「……………」

葉月はその写真を、いや、その老人をじっと見つめていた。

とても、大切な人……

葉月の心のどこかでそう告げている。

……そうだ。

この人は……

「おじいちゃん」

遠い昔の記憶。

とても大切な、大切な記憶が葉月の脳裏にゆっくりとよみがえった。

第七話（後書き）

読んでくださっている皆様、ありがとうございます
どうですか？

読みにくい部分等ありましたら、いつでもコメントしてください
調子はいいいので、明日も一話更新できそうです。

第八話（前書き）

葉月の遠い昔の記憶。

笑いあう祖父との思い出。

そして、別れ。

残された不思議な写真を目にした幼き葉月はあることを決意した。

第八話

それは、葉月の遠い過去の記憶。

「ねえおじいちゃん！ 今日もアルバム見せて！」

「はっはっは。今日も葉月ちゃんは元気だな。いいよ。おいで」

葉月は祖父のアルバムを見るのが大好きだった。

写真家の祖父、時雨天高しぐれあまたか

自然風景専門の写真家で、祖父は毎日各地を飛びまわっていた。

時には北へ。

時には南へ。

時には、遠い国へ行くことも。

カメラを手に世界を歩く祖父が、葉月は好きだった。

だから葉月は毎日のようにアルバムを見せてもらっていた。

「この写真はどこで撮ったの？」

「これかい？ これはずっとずっと北の寒い国の森で撮った写真だよ」

「おじいちゃん寒いのが嫌いなのに？」

「カメラを構えたら寒さなんてへっちゃらだよ」

「すごい！」

自分では見られない風景や世界。

それを全て祖父が、祖父の写真を見せてくれる。

葉月はそれが大好きだった。

葉月は祖父の柔らかな笑顔に微笑みかえして、

「私も、おじいちゃんみたいにしやしんかさんになりた〜い！」

「おお！ それは楽しみだなあ。葉月の撮った写真を早く見てみたいなあ」

「まっかせて！ どんな場所がいい？ 遊園地？ それとも……」
祖父のような写真家になりたい。

祖父に、私の見た景色を、世界を見せてあげたい。
だから私は……

「……おじいちゃん」

「ああ……葉月ちゃん。どうしたんだい……悲しそうな顔をして」
「お母さんが、もうおじいちゃんには会えなくなるって……」

「そっかあ……葉月ちゃんは寂しいかい？」

「寂しいよお！ ずっと一緒にいたいよお！」
泣きだしそうになる葉月。

ベッドの上の祖父はそれを見て、寂しそうに微笑んだ。

「泣いちゃダメだぞ？ 別に二度と会えなくなるわけじゃないんだ」
葉月の後ろで、両親は泣いていた。
顔をそむけて。

声を押し殺して。

「葉月ちゃんはおじいちゃんに写真を見せてくれるんだろう？ お
じいちゃんは待ってるから」

「うん……ゼツタイ……見せる」

力ない手でばんぼんと頭を撫でてくれた祖父。
そして、部屋を後にして……

祖父が亡くなった。

葬式はあいにくの雨だったが、それでも大勢の人たちが来てくれて
いた。

葉月は終始泣きっぱなしだった。

「葉月ちゃん。ちょっといい？」

式が終わってしばらくして、部屋で休んでいると祖母が葉月に声を
かけた。

「なあに？ おばあちゃん」

「これ、おじいちゃんから」

取り出したのは小さなアルバム。

何度も祖父のアルバムを見ていた葉月だったが、このアルバムは初めて見るものだった。

それを葉月はゆっくりと開くと、不思議なことに最初のページにはなにもなかった。

「写真ないよ？」

「それは天高さんの宝物なの。一番後ろのページを開いてみて？」

「うん……」

言われたとおり、葉月はアルバムの最後のページを開いた。

そこには、一枚の写真が収められていた。

「この写真は？」

「天高さんの見たい景色、かしらね。ずうっと昔に天高さんが偶然撮影できた写真だって言ってたわ」

その写真は残念ながらピンぼけ写真で、真っ赤な光が写っているだけで詳細がわからなかった。

「どうして？　これがおじいちゃんの宝物なの？」

「そう……ねえ。天高さんは、それが幻想郷の写真だって言ってたかしら？」

「げんそうきよう？」

聞いたこともない言葉に首をかしげる。

それを見て祖母は笑いながら言った。

「幻想郷っていうのはね、おとぎ話の国のことよ葉月ちゃん。とても素敵な場所だったって天高さんは言ってたけど、これじゃただのピンぼけ写真よねえ……」

おとぎ話の国。

祖母はそう言った。

葉月はそれを聞いて、ものすごくドキドキしていた。

おじいちゃんは、おとぎ話の世界をも写真に収めることもできたすごい写真家だった。

それはとてもすごいことで、とても誇れること。

もしかしたらおじいちゃんは、ずっとこの世界を夢みて旅をしていたのかもしれない。

ならば、私に出来ることは……

「おばあちゃん」

「どうしたの？」

「私決めた。この、げんそうきょうの写真を撮っておじいちゃんに届ける！ だから写真家になって、ゼツタイゼツタイげんそうきょうにいく！」

「おやまあ。そんなこと葉月ちゃんにできるのかい？」

「やる！ ゼツタイ写真撮るもん！」

祖母は本気で信じてくれたのかどうなのかわからなかったが、嬉しそうに微笑んでいた。

いつか必ず、祖父に幻想郷を見せてあげたい。

その想いは幼き葉月の胸にしっかりと刻み込まれた。

第八話（後書き）

オリジナルキャラクターである葉月の回想の話です。

個人的に葉月の祖父、天高という名前が気に入っています。

この二名のオリジナルキャラクターにはちょっとした共通点があります。

些細なことだから気づきにくいけど、気づく人いるかな？

第九話（前書き）

過去の記憶。祖父との思い出。

話を聞いた文は、葉月に幻想郷を巡る旅を提案する。

彼女の護衛には柊を選択した。

そして二人は幻想郷の各地を巡る旅に出る。

第九話

「ははあ。なかなか興味深い話でしたねえ……って椀？　いくら犬だからってわんわん泣くんじゃありませんよ」

「わ、わんわんなんて泣いてません！　っていうか犬じゃありませんし泣いてもいませんよ。……ただちょっとほろりとしてしまっ
て」

懐からハンカチを取りだして涙を拭う椀。

文は少し考えるようにあごに手をあてると、

「しかし今の話を聞くかぎり、あなたはこの世界の外の世界からきた人間ですよ。どうやってこの世界に来たんでしょうか……？」

「それは私にも……」

昔の記憶がよみがえっても、葉月は現在に至るまでの経緯をまったく思い出さなかった。

不安げにうつむく葉月。

椀はそんな彼女を見てから、文へ意見する。

「それで、彼女の処遇は？」

「そうですねえ……別に悪意があって妖怪の山に侵入したわけではないみたいです、お咎めなしってことでいいんじゃないですか？」

「え？　だって大天狗様に報告は」

「シャラップ椀！　それについては私が後で報告しておきます。それより……」

文はうつむいたままの葉月に視線を戻し、

「あなたはどうしたいですか？　このままここにいたいのですか？」

「え？」

そして悪戯っぽく笑んで見せると、

「せっかく幻想郷へ来れたのですから、そのカメラでビシバシ激写したいでしょう？　おじいさんのためにも、ね？」

「文さん……！」

「では決まりですね。椀！」

「は、はい！？」

突然呼ばれて思わず大声を出してしまった椀。

「あなたに彼女の護衛を命じます。彼女の行動の補佐をなさい」

「わ、私が？ それじゃ哨戒の任が……」

「それはこの河童にでも任せます。適当なガードロボットでも作つてもらいますよ」

「お、おい無茶苦茶言つなよなあ」

「出来ないのですか？ ではあなたもこの白狼天狗と一緒に彼女を侵入させた罰を受けてもらいま」

「……わ、わかったわかったよう。はあ。しょうがないなあ……もう」

文の無茶苦茶な注文に、やれやれといった感じでにとりはため息をもらした。

「先輩。彼女の補佐つて、なにをしたらいいんですか？」

「あなたには彼女の足になってもらいます。彼女に、この幻想郷を案内してあげてください」

「案内……ですか？」

すると文は手帳にペンを走らせなにかを書き込むと、それをやぶつて椀に渡した。

「適当に観光名所を挙げてみました。ここならいい写真が撮れるんじゃないですか？」

「えつと……」

それを一通り確認して、

「……こんな場所入って大丈夫なんですか？ どう見ても入ったら怒られるような……」

「私の名前を出せば幻想郷のフリーパスになりますよ？」

「ほ、ホントかなあ……」

不安そうにメモと文の顔を交互に見る椀。

「大丈夫……かなあ？」

「葉月さんもよろしいですか？　今から彼女を好きに使ってくれて
かまいませんので、この幻想郷を自由に見て回ってください」

「わ、わかりました」

葉月は何度もうなずいた。

今から、幻想郷を見てまわれる。

祖父同様に旅ができる。

そう思うと、胸がいっぱいになって……

「それでは、葉月さん一緒に……わ、葉月さんどうかしたんです
か！？」

椛が振り返ると、葉月はぼろぼろと涙を流していた。

心配する椛に、葉月は首を横に振ってみせて、

「ち、違うんです。ただ、すごく嬉しくて……つい……」

「感極まった、といったところでしょうか。わかりますよその気持ち。
私も特ダネをつかんだときはこう、グツとくるもんです……」

「おまえ、ちよつと黙ってたほうがいいんじゃないか……？」

拳を握りしめる文に、にとりはあきれた様子で言った。

そして葉月は椛に向かって丁寧な頭を下げて、

「よろしく願います。椛さん」

「こ、こちらこそ！　この犬走椛、全力であなたを助力いたします
！」

椛もかしこまって葉月に一礼をした。

そして。

「ところで、どうやってその場所へ向かうんですか？」

「そうでした。あなたは飛べませんから……そうだ。私の背につか
まってください」

「こ、こうですか？」

「ええ。しっかりつかまっててくださいよ？　飛びます！」

「え、と、飛ぶって……きゃあ！？」

「椀？ 彼女用にスペルカードを……ってあら？ もういつちや
いましたか」

ぼんやりと空を見上げる文に見送られ、二人は幻想郷を巡る旅へと
出発した。

第九話（後書き）

ここから少し作業が遅れそうです；
次のお話は、もしかしたら月曜日辺りになるのかも……

第十話（前書き）

妖怪の山を降りる椀と葉月。

二人は最初の目的地である紅魔館を目指すのであった。

第十話

「すごい……私、空飛んでる……！」

葉月の眼下に広がる景色が、びゅんびゅんとすごい速さで移りかわっている。

柊は木のとっぺんに上手く着地して、また蹴って飛んでいくのくり返し。

「厳密に申しますと飛んでいるのは私ですが……まあ、この幻想郷に生きる妖怪のほとんどは飛べますよ。飛べないのは里に住む人間だけでしょうか？」

「妖怪……？　そういえば、さっきも妖怪の山とか河童とか言ってたけど……柊さん妖怪なの？」

「ええ。そうですよ」

「え、ええ！？　妖怪！？　お、お化けえ！？」

突然暴れ出す葉月に驚いて、柊は一瞬バランスを崩しそうになって、「ちょ、ちよつと葉月さん急に暴れたりしないでください！　危ないですよ！」

「す、すいません……」

怒られて、一応落ち着きを取り戻したがしゅんとなる葉月。それを確認してから柊は再び木を蹴った。

「そ、その、妖怪なんて初めてだし、怖くてあの、その……」

「怖い、ですか。でも大丈夫ですよ。ここには人間に悪さするような妖怪はいませんから安心してください」

「本当……ですか？」

心配そうにつぶやく葉月が、柊には少しおかしくて、

「私はどうです？　やっぱり怖いですか？」

「柊さんは……その……」

「その？」

「……柊さんは、かわいいです」

「へ！？　ちょ、わわわッ！」

葉月の予想外の言葉に、椛はうつかり足を踏み外しそうになって、

「だ、大丈夫……ですか？」

「え、ええ。一応……しかし、か、かわいいだなんて……」

背中を振りかえると、葉月はにっこり微笑んでいて、

「なんだか子犬みたいで……すごくかわいいですよ？」

「こ、子犬……ですか」

ははは、とかわいた笑いを浮かべる椛。

（私は白狼天狗なのに、なぜ皆一様に私を犬と称するのだろう……？）

椛の、誰にも聞こえないような小さなつぶやき。

「こ、コホン。そんなことより、そろそろ目的地が見えてきましたよ」

「え？　どこですか？」

「あれです」

椛が指差す方向に、紅い色の屋根のようなものが見えた。

「あれは？」

「最初の目的地、紅魔館です」

そして椛はいつそう強く木を蹴ると、一気に山を下りていった。

第十話（後書き）

ちよつと遅くなりました；
ここから幻想郷巡りが始まります。
最初の目的地は紅魔館です。

第十一話（前書き）

紅魔館に辿り着いた二人。

門番を起こすか起こさないか。

二人で悩んでいると、箒をもった少女が目の前でなんの気兼ねもなく紅魔館へと入っていった。

第十一話

葉月の目の前に広がる、とても大きくて豪華な紅いお屋敷。

「うわぁ……」

柊は今しがたこの建物を、紅魔館と呼んでいた。

「よっ……と。到着しましたよ葉月さん」

その建物から少し離れた場所に着地すると、柊は門の方へと視線を動かして、

「すごいお屋敷…… お姫様でも住んでそうだなぁ……」

「姫ではなくお嬢様なら住んでますよ。まあ行けばわかります。…

…しかし、こういったお屋敷って普通警備が厳しそうなんですけど

……」

「…… 入れるの？」

「とりあえずいつてみますか」

門の前まで歩いてみると、案の定門の前には誰かが立っていた。

葉月と柊が近付いてみると、

「……………」

門の壁に寄りかかって静かに目を閉じる少女の姿。

拳闘着に身を包んだ、やや背の高めの赤い髪の少女。

しかし、耳を澄ますと小さな寝息が聞こえてきて、

「…… 寝てるんですか？ この人」

「寝てますね。完全に。こんな方に門の番人をさせているなんて警備が薄いですねえ……」

そして柊はあちこち見まわしてから、

「他に警備の者はいないようですね。この方を起こして聞いてみま
すか」

「でも、起こしたらやっぱり入れてもらえないんじゃないかな？」

「むう…… しかし勝手に入るのも無作法ですよ？ やはりこういう
ことはきちんと了承をいただいてから」

「邪魔するぜ」

ふと、荒っぽい声がしたので振り返ってみると、門の前に人影が見えた。

魔法使いがかぶるような三角の帽子に、黒と白のローブ。流れるような金の髪に手には箒をひとつ握りしめていた。

その姿は、まるでおとぎ話に出てくるような魔法使いそのものだった。

「え、あの人……？」

そして少女はなんのおかまいもなしに勝手に門の奥へと進んでいった。

「彼女……たしか前に山に侵入した魔法使いの……」

「入って大丈夫なのかな？」

「とりあえずいつてみましょうか」

その少女を追いかけるように、二人は門の奥へと向かった。

第十一話（後書き）

このお話からいろんなキャラが登場します。

オリジナルのキャラを壊さないようアレンジできるかちょっと心配です；

第十二話（前書き）

図書館で出会った二人の魔法使い。

葉月と柊は撮影の許可を得た途端、すぐさま紅魔館を飛びだした。
そして去りゆく二人を、紫の瞳はぼんやりと見つめていた。

第十二話

「おいパチュリー？ 本を借りにきたぜ」

ほこりっぽくて、カビ臭くて、暗い部屋。

ここは紅魔館の中に位置する巨大な図書館。

正式な名前があつたのかなかったのか。

それはこの館の主のように、長い年月を生きたせいで、その名を忘れてしまったのかもしれない。

「……いつもくるのはいいけど、私は借りていいだなんて一言も言っていないわよ？」

「いいじゃねえか。こんだけ本があるんだし、そのうちの一冊や二冊ぐらい借りたって」

「魔理沙。あなた一体今まで何冊本を借りたと思ってるの？」

「んなこといちいち覚えてねーよ。お、これ面白そーじゃん！」

タイトルを見ただけで表紙を開くのは、先ほどの口調の荒い魔法使いのような格好をした魔理沙と呼ばれた少女。

それを咎めていたのは、紫の髪をなびかせる薄い桃色のネグリジェのようなローブ姿の少女。

パチュリーと呼ばれたその少女は、先ほどから本棚を漁る友人にゆるんだ紫の瞳を向けて、

「いっつもいっつも本を勝手に借りていくけど、許可もなしに借りていくことに罪悪感を覚えないわけ？ 一応この本は紅魔館の財産であり、私の大切な……って聞いているの魔理沙？」

「魔力増幅……こんな方法もあるのか。へえ………お、こっちは錬金術の本？ どれどれ……」

「……聞いているわけないか」

そしてパチュリーは読んでいた本を閉じると、一度大きく伸びをしってから、

「それで？ 魔理沙が連れてきた部外者さんはそこでなにをしている

のかしら？」

「……やはりばれてましたか」

本棚の裏に隠れていた椀が姿を現す。

もちろん、一緒に隠れていた葉月も。

「ん？ アタシが連れてきたってこいつらをか？ アタシは知らないぞ」

「見つからないように気配は消していましたが……」

「それでも妖怪の気配ぐらい気付きなさいよ」

「んなこといちいち気にしねーって」

そして、言い合う二人の視線が一気に葉月に向かって、

「で、誰だおまえ？」

「見かけない顔……ね」

「おまえはいつつも図書館にいるんだから知るわけねーだろ」

「失礼ね。たまには外に出るわよ。たまには」

「あ、あのそのえつと……」

激しい口論を目の当たりにして怯える葉月。

「彼女は葉月さんといって、えと、私の友人です」

そんな彼女を椀がフォローに入る。

それで少し安心した葉月が姿勢を整えてから、

「あの、時雨葉月……です」

「ふうん……？ 時雨とはまた聞かない字あざなだな。アタシは霧雨魔理沙キリサメマな」

「……。パチユリー・ノーレッジ、よ」

何故か機嫌悪そうに、顔をしかめてみせるパチユリー。

「それで。なにか御用なのかしら？」

「えっと、今葉月さんと幻想郷を巡っている最中でして、道中で訪れた美しい場所を彼女のカメラで撮影したいのですが」

「へー。文のパシリみたいなもんか？」

面白そうににやにやしながら言う魔理沙に、椀は少しむっとした顔になって、

「し、失礼な。えと、彼女の思い出づくり……といったところでし
ようか？」

「おまえついには人間のパシリまで……」

「してませーん！？ 私は先輩の部下であってパシリじゃないです
！」

「……ところで、図書館で大声をあげるというのもどうかと思うの
だけれど？」

「う……」

「えと、そのう……」

もつともなことを言われてたじろぐ椛。

葉月は口論の間であたふたしていることしかできなかった。

「……まあ、紅魔館が美しい場所と称されたのは素直に喜ぶとして
……撮影、か。私はこの館の主ではないのだから勝手に許可できな
いわね」

「そうですか。……困りましたね」

「で、でも、お屋敷の中に入ただけでも嬉しかったですよ」

「しかし……」

笑みを浮かべて見せた葉月に、椛は申し訳なさそうな顔になる。

それを見てパチュリーはうんと小さくうなづてから、

「……そうね。外観から撮るのくらいならかまわないんじゃないや
いかしら？ それぐらいなら咲夜も気にしないでしょ」

「ホントですか！？ ならさっそくいきましょう葉月さん！」

「は、はい！」

「あ、ちよつと待ちなさ……」

まるで疾風のごとく、椛と葉月はすごい速さで図書館を飛びだして
いった。

「ふう。落ち着きのない人たちね。……ねえ魔理沙、彼女の気配は
感じた？」

「あん？ だから気配なんて気にしてねーって」

「そう……」

パチユリーはあごに手をあて思案するようにつつむいて、

「……まあいいわ」

それから、読みかけていた本を再び開いた。

第十二話（後書き）

いつも読んでくれてる方々、ありがとうございます。
あつという間に十話過ぎちゃいましたw
お話が終わるのは……いつになるかな？

第十三話（前書き）

紅魔館を出てから葉月は柩と協力して写真撮影を行った。

撮影を終えて柩と出発しようとしたその時、時計塔の上に不思議な人影を見つける葉月。

しかし、振り返ってみてもそこにはだれもいなかった。

第十三話

「葉月さん。準備はよろしいですか？」

「えっと、ちよつと待って……」

紅魔館から少し離れた位置で、葉月はカメラのチェックをしていた。バッテリーに撮影環境、フォーカスやらピントやら。入念なチェックを終えて、葉月はカメラをかまえる。

「おおー。なんか似合ってますね」

「えへへ、ありがとう」

褒められれば誰でも嬉しくなる。

葉月はほんの少し照れつつ、レンズ越しの世界を注意深く見つめていた。

湖畔と、メインである紅魔館とのバランス。

大きな時計塔も写したいし、広がる湖畔も捨てがたい。

うんうんとうなりながら、微妙に移動したり、しゃがんだり、背伸びを試みたり。

「……私は暇ですね」

ふわぁつと欠伸をして木に寄りかかる桜は、葉月の作業を後ろから見守ることしかできなかった。

そのせいで、なにもすることがない。

「ううん、これだと木が邪魔になっちゃうな……」

「でしたら私が一刀両断しましょうか？」

「や、えっと、そこまでは……」

「そうですか……」

すると、桜は一つひらめいて、

「なら、少し飛んでから撮影してみませんか？ 私も手伝いますから」

「え、でも……」

遠慮がちに手を振る葉月に桜は笑顔で、

「あなたの補佐をするのが私の任務ですから。少しぐらいわがまま
いってくれてかまいませんよ？ それに、私個人もあなたのお力に
なりたいですし」

「本当？ そ、それじゃあお願いしようかな……」

「了解しました。それじゃあつと」

手近なところにちょうど良い木が立っているのを見つけると、椛は
葉月を背負ってから一瞬で飛んだ。

「どうです？ ここからなら一望できますよ」

「うん。これなら時計塔も湖も一緒に写せる」

紅魔館の大きな時計塔と湖畔の両方をいっぺんにレンズに収めると、
葉月は背負われたままの姿勢でシャッターを切った。

「これで紅魔館での作業は終わりですね。お疲れ様です葉月さん」

「椛さんのおかげだよ。ありがとう」

二人は笑いあいながら紅魔館を後にする。

葉月がもう一度紅魔館を見ようと振り返ると、

「……え？」

時計塔のてっぺんに小さな人影が見えた。

遠すぎてあまりはつきりとは見えなかったが、その人影には翼のよ
うなものが見えた気がした。

しかしそれは鳥が羽ばたく翼とは似ても似つかない、宝石のような
ものが七色に輝いていて……

「椛さん、あれなに？」

「え？ なにか見えたんですか？」

振り返る椛。

葉月も振り返ってからもう一度時計塔を見ると、そこにはだれもい
なかった。

「あ、あれ？」

「なにか見つけたんですか？」

「え、えっと時計塔の上に人影を見たはず……なんだけど」

「……いえ、なにも見えませんが？　気のせいではないですか？」
「そう……なのかなあ」

葉月は微妙に納得がいかなかったが、それ以上考えることを諦めて歩き出した。

「白い犬と……へんなの」

葉月が見かけた人影はいつの間にか紅魔館の門の前に立っていて、

「へんなの来てたなら私も遊びたかったなあ」

寂しそうにつぶやいた後、ふっと姿を消してしまった。

第十三話（後書き）

自分のミスで読者の方を不快にさせてしまい、申し訳ございませんでした。

二次創作をするうえのでマナーがなってませんね……

次のお話も明日投稿します。

第十四話（前書き）

一方、文は人間の里で博麗神社の巫女である霊夢と一緒に行動していた。

すると人間と話をしている見覚えのある死神、小野塚小町の姿を見つける。

彼女はとある命令である人物を探していた。

その人物の特徴を聞いて、文はあの少女の姿が脳裏に浮かんだ。

第十四話

所変わって、ここは紅魔館から離れた場所にある人間の里。

椈の上司である射命丸文は巫女装束姿の少女と一緒に歩いていた。

赤い大きなリボンで髪をくくった清楚な顔立ちの少女。

名を、博麗^{はくれいれいむ}霊夢。

彼女は里からほど近い場所にある神社、博麗神社の巫女である。

「……私につきまとしてても面白い記事なんか書けないわよ文？」

「『里まで下りて賽銭をかき集める貧乏巫女！』『博麗神社の崩壊カウントダウン！』なんて記事はダメですか？」

「失礼ね。私はただ単に買い物をしに来ただけよ。というか勝手に神社を崩壊させないで」

「そうですね。崩壊寸前なのは日常茶飯事ですし」

「私を怒らせたのかしら？」

「いえいえめつそうもありませ……おや？」

すると、文の視線の先に大きな鎌を手にした少女の姿があった。

紅色の髪を二つに束ねた背の高い少女は、なにやら楽しそうに話をしている。

二人とも見覚えのある人物のようで、

「なんであのサボリ死神が人間の里に……？」

「これってばスクープの予感！ 文、行きまーす！」

「あ！ ちょっと待ちなさいよ！」

飛び出していく文を慌てて追いかける霊夢。

その少女も、こちらに気づいたようで、

「お、霊夢に天狗か。あんたたち、こんなとこでなにしてんだい？」

「それはこっちの台詞よ。なんであんたがこんなとこにいるのよ」

「ついに三途の川をクビになって職探しですか？」

「おいおい、あたいがいつクビになったって？ こんな真面目で愛らしい死神を映姫さまが見捨てるわけないじゃないか」

主張の激しい胸を張りながら自信満々に言う少女。

「あれ、いつぞやクビになりかけたのでは？」

「な、なっていないって。実際あたいは今仕事なんだよ」

「仕事？ サボり死神の小町が？」

サボり死神、小野塚小町おのつかこまちはその言葉に顔をしかめて、

「だから仕事でだつての。実は人を探しててね。あんたたち変なやつ見かけなかったか？」

「変なヤツ……」

霊夢と文は顔を合わせてから、

「目の前に」

「サボらない小町さんは変ですね」

「……おまえら」

はあとため息をついた後、小町は真面目な顔になって、

「少し前な、こつちでちよつとした騒ぎがあつたんだよ」

「騒ぎ？ って、私そんなこと知りませんよ？ そんなスクープがあつたのならどうして私に教えてくれなかったんですか」

「私も異変があるだなんて気づかなかつたけど？」

「ん……異変つちやあ異変なんだけどさ……」

小町が言葉を濁す。

その様子に文は瞳を輝かせて興味津津。

対して霊夢はあまり興味のない様子。

「詳しく話を聞かせてくださいよ」小町さんツ？」

「おまえらなら話しても……まあいいか。実はさ、三途の川で死者が一人いなくなつちまつたんだよ」

「はあ？ やっぱりあんた仕事をサボつてたんじゃないの」

違う違うと小町は首を振って、

「いや、仕事はちゃあんとやってたさ。でも、ホントに一人いなくなつてさ……」

「いなくなつたって、あんたのボ口船に乗ったら死者はそのまま彼岸へ行くんでしょ？」

「そうさ。渡し賃をいただいて後はそのままあたいがのんびり舟をこぐだけ。……けどさ、そいつつてのは最初から変な感じでさ」

「変な感じ……」

胡散臭そうに眉をつりあげる霊夢。

文はさつきからすごい速さで手帳にメモしまくっている。

「『私はまだいけない』だとか、『やることあるんだ』だのぼそぼそつぶやいてて、終いにや勝手に船を降りたんだ」

「え？ あの船って一度乗ったら降りれないんじゃないんですか？」

「それになんでそいつしゃべってるのよ。幽霊がしゃべるわけじゃない」

「だから変なヤツだつていつてるだろ？ それでそのことを報告したら、映姫さまが難しそうな顔してさ。それで、あたいはそいつを連れてくるように命令されたんだ」

「立派な異変じゃないですか。それで、その人の特徴とか覚えてないですか？」

「特徴？ んー、そうだな……」

小町は思いだすように腕を組んでうなづいてから、

「紺色の見かけない服……それと、おまえの持つてるのに似たようなものを持つてたような……」

「え、これ……ですか」

小町が指さしたのは文には必須の仕事道具。

紺色の服に、カメラを持った人物。

文の脳裏には一人の人物が浮かび上がっていた。

「カメラねえ……？ そんなものをもったヤツなんて私はこいつぐらいしか浮かばないけど……？ って、どうかしたの文？」

「え？ は、はい！？ いつも清く正しい射命丸ですよ？ な、なんですか霊夢さん？」

だれにでもわかりやすいくらい動揺する文。

その様子を見てから霊夢はにんまりと笑って、

「文には心当たりがあるみたいね。なら、今回はあなたにまかせる

わ

「こ、ここ心当たりだなんてありませんよ？ 全然！ 全く！
これっぽっちも！」

「バレバレよ。小町、こいつ連れていったら？ 役に立つわよきつ
と」

それに小町は大きくうなずいて、

「そうみたいだね。それじゃ遠慮なく連れていかせてもらうよ。ほ
ら天狗いくぞ！」

そして

「ああゝ！？ ちょっと霊夢さんひどい！？ こうなったら仕返しに、
後で霊夢さんのとんでもない写真ばらまいてやゝあゝ！」

怒声を響かせながらずるずると引きずられていく文を見送ってから、

「……とりあえず文と小町にまかせておけば大丈夫でしょ。私は帰
つてお茶でも飲も」

ふんふんと鼻歌交じりに霊夢は神社の方へと歩いていった。

第十四話（後書き）

小町の性格が微妙に変な気がするような……
読んでくれている方々、ありがとうございます。
次の更新は月曜日になりそうです。

第十五話（前書き）

そして冥界に辿り着く椛と葉月。

怯える葉月をからかう椛。

ささいなことで笑いあえる二人の間には、すでに確かな絆があった。

第十五話

「さて、冥界に着きましたが……葉月さん大丈夫ですか？」

後ろでぶるぶると震えている葉月。

葉月は椀の腕をひしとつかんでいて、

「こ、ここお化けばかりで怖くて怖くて……」

「そりゃあここは冥界、死者の世界ですからね。でもなにもしてこなかったし大丈夫だったでしょう？」

「それはそうなんだけど……」

未だに腕をつかみっぱなしの葉月に、椀は優しく微笑んで、

「ここの幽霊も無害ですよ。もう逝き先が決まっていますから」

そして椀はあたりを一度見まわす。

特に目立つものもない、ただ荒涼とした平野が広がるだけの殺風景な世界。

いまのところ、目的地の白玉楼は見えていない。

「しかし葉月さんはホント怖がりなんですネ。そんなんじゃこの幻想郷を見てまわるだなんてできませんよ？」

「だって私、お化けとかホントに苦手で……」

「もしも自分の写真にお化けが写ったらどうするんですか？」

「えー!? し、心靈写真なんて嫌だよ!？」

血相変えて言い切る葉月の表情が楽しくて、思わず椀は笑ってしまった。

「わ、笑い事じゃないですー!」

「あつははは。いえ、すいません……ふふ」

「もう……意地悪」

ふくれっ面で椀を見つめる葉月。

そして二人は仲良く笑い合った。

「……ねえ、椀さん？」

「なんですか？」

ひとしきり笑ってから、葉月はなぜか少し寂しそうな顔をして、

「私たち、もう……友達だよね？」

そんな顔をされた椛は思わず目を丸くしたが、すぐに笑顔に戻って、

「ええ。あなたはもう、私の大切な友人の一人ですよ」

椛は一片の迷いもなく答えた。

それに葉月は優しく笑んで、

「そっか。……ありがとう」

急に照れくさくなった椛は、顔の火照りを隠すためにそそくさと立ち上がった。

「そ、それではそろそろ出発しましょうか。時間が惜しいですね」「うん」

そして二人は再び歩き出した。

第十五話（後書き）

次のお話は戦闘回になります。

ちよつとだけお楽しみにしてください。

戦闘シーンはあんまり自信ないんで少し不安ですけど……；

第十六話（前書き）

白玉楼へと伸びる石段。

背中に感じる殺気を警戒しながら歩く椋。

そして門の前に辿り着いた途端、葉月に向かって白刃が襲いかかった。

第十六話

二人がしばらく歩いていると、目の前にとても大きな階段を見つけた。

一見するとなだらかな傾斜の石段だが、その先を見上げてみると真っ白い霧に包まれていてその奥はなにも見えない。

それはつまり、この石段がとても長いということの意味していて……
「ほえ……。こ、これを上るの？」

「ここ以外の道が見当たりませんし、上るしかないですね」
「……………」

思わず言葉を失う葉月。

（……白玉楼に住んでいる人は毎日ここを上るのかなあ……大変そう）

そんなことを考えながら階段の前でぼんやりしていると、柵はさっそく階段を上り始めていて、

「さ。いきますよ。……ぼんやりしてどうしたんですか？」

「あ、いやなんでもないです」

（……エスカレーターみたいに動いてくれればいいのに）

心の中でつぶやいてみるが、もちろん石段は動かない。

結局葉月はその長い石段をゆっくりと上りはじめた。

石段を一段一段上るごとに首筋をなでられるような気味の悪い寒気を感じ始める二人。

「さ、寒気がしますね……」

「そう……ですね」

一方で、柵はあることに気づいていた。

（誰かが私たちのことを見て……）

ちらちらと、殺気を含んだような視線がこちらを監視しているような気がしていた。

どうも最初から、階段を上りはじめたところからずっと見られている

らしい。

でも、気配はまったく感じない。

これだけ上手く気配を殺しているということは、恐らく相手は相当の手練てだれだろう。

柊は少しだけ葉月のそばに寄ってから、腰の太刀に手をかける。

いつでも対応できるように静かに力をこめながら、周囲に意識を向ける。

「柊さんどうかしたの？　なんだか怖い顔をして……」

「え？　あ、いや別になんでも……」

気づかぬうちに表情が強ばっていたのだろうか、葉月が柊の顔を見て心配そうに眉をひそめた。

それ以上不安を与えないように、柊は笑みを作ってみせて、

「来たことのない場所ですので、少し警戒してしまって」

「でも、ここの幽霊は無害なんでしょう？」

「ええ……」

葉月には気づかれないよう、柊は笑みを崩さないようにしながら太刀を握る。

こんな足場の不安定な場所で襲撃されて対応できるだろうか？

彼女を守りながら……戦えるだろうか？

柊の全身に緊張感がまわりつく。

いつ。

どこから。

どうやって攻めてくる？

頭の中であれこれ思考を巡らせていると、いつの間にか石段を上りきっていて大きな門扉の前に辿り着いた。

「うわあ、大きな門……」

「これが白玉楼の……」

静かにそびえる木製の大きな門。

足を踏み入れようとしたその時、先ほどから感じていた殺気が一気に膨れ上がって、

「……ッ！？　葉月さん危ない！」

「え？」

刹那。

葉月に向かって目にも止まらぬ速さの白刃が襲いかかる。

桜は獣のような瞬発力で地を蹴ると、葉月を抱えて大きく後ろに飛んだ。

「何者！？」

「外しましたか。一太刀で仕留めるつもりだったんですが……」

葉月の元いた場所には帯刀した一人の少女が静かに立っていた。

緑色の可愛いスカートに、子供のような幼い容姿。

背丈も普通の子供と同じくらいだが、幼さの残る容姿には不釣り合いな刀を帯刀していた。

脇差と同等の長さの刀と、それより少し長めの刀を、一方を背に収め、もう一方は右手に構えている。

その少女は険しい表情で二人をにらみつけてきて、

「ですが、この白玉楼に侵入する不埒な輩は誰であろうと……斬ります！」

「葉月さん下がって！？」

少女は一瞬で踏み込み、桜との距離を一気に詰めてきた。

「速いッ！？」

「せいやああ！」

そして放たれた鋭い袈裟斬りを、桜はギリギリのところで避ける。

頬をかすめる刃と、それと同時に巻き起こった凄まじい風圧に顔をしかめる桜。

一体こんな小さな体のどこにそんな力があるのだろうか……

崩れた体制を整える桜の頬に嫌な汗と赤い雫が滴り落ちる。

「も、桜さん！？」

「大丈夫……ですよ」

「……？　もう一人は人間……？」

頬の血を腕で乱暴に拭くと、桜は太刀と盾を構える。

本気の戦闘なんていつ以来だろうか。
椛は目の前の少女に意識を集中させる。

……しかし彼女は圧倒的な強さだ。

今の一瞬で大体の実力差を把握した。

恐らく、無傷で勝つなんてのは到底不可能な相手。

どうにか勝つために思考を巡らせていると、その隙を逃さんとはかりに少女は烈風の如く激しく斬りつけてきた。

「せい！ はあ！ でええい！」

「ぐ……ッ！ これでは、ちよつと……！」

放つ刃の軌跡が見えないほどの神速の太刀が再び襲いかかってくる。
椛はその攻撃をすんでのところで防ぐので精一杯だった。

反撃しようにも、こんな太刀筋を見せる相手に一瞬でも気を抜いたらあっさり斬られてしまう。

どうしようもなかった。

こんなにも力の差があるのでは、もはや勝てるかどうか……

「はああッ！」

それはほんの一瞬の迷い。一瞬の油断。

少女はその一瞬を見切って刀を大きく横薙ぎに払うと、椛の太刀が大きな弧を描いてから地面に突き刺さった。

「ッ！ しまった！？」

「勝負、ありましたね」

「ぐ……ッ！」

椛の首筋に刃を突きつけ冷たく見据える少女。
寸前まで迫る死の気配。

ここまでかと諦めたそのとき、

「やめて！」

悲痛な叫び声が、聞こえた。

葉月は椛と少女の間に割って入ってくると、目いっぱい両手を広げて少女に立ちはだかった。

全身をガクガクと震わせながら、それでも懸命に椛を守ろうとして

いる。

「だ、ダメです！ 葉月さん逃げて！？」

「嫌！ 友達を、椛さんを死なせたくない！」

「……いいでしょう。では、望み通り二人まとめて」

「ッ！？ やめ ！」

そして少女の刃が容赦なく二人に襲いかかるうとしたその瞬間、

「はーい、ストップストップ？」

この緊迫した場に全く相応しくないなんとも間の抜けた声が響くと、少女の刃が葉月の首筋でぴたりと止まった。

声の方へ振り返ると、少女は驚愕の表情を浮かべて、

「ゆ……幽々子様！？ どうしてここに？」

白玉楼の門の前に、にこにこ微笑む桃色の髪をした少女が現れた。

「え……？ あれ、生きてる……」

椛と葉月はお互いの体を確かめてから、幽々子と呼ばれた少女の方に視線を動かす。

着物とは違うゆったりとしてどこか優雅さが漂う衣。

地に足付かないようにふわふわとした感じで、少女は穏やかに微笑んでいる。

桃色の髪を揺らしながら、少女はおっとりとした声音で、

「ダメじゃない妖夢ったら。私の大切なお客様を斬りつけちゃ」

「え！？ お、お客……様？」

妖夢と呼ばれた少女は葉月と椛と、それからにんまり笑う幽々子とを交互に見てから、

「ほら、ちゃんと謝って？」

その笑顔に、妖夢の表情は見る見るうちに蒼白に変わり、

「も、もも……申し訳ございませんでしたあー！！」

そして少女は地面に頭がぶつかりそうになるぐらい、深く深く頭を下げて謝罪した。

第十六話（後書き）

文章の拙さはご容赦ください；

自分でも納得のいく文章がなかなか書けなくて書いたり書き直したり……

早く上手に書けるようになりたいです。

第十七話（前書き）

白玉楼の主、西行寺幽々子に招き入れられた椛と葉月。
にこにこ微笑む幽々子に、椛は思い切って撮影の許可を申し出る。
すると、意外なほどあっさり承諾を得たのだった。

第十七話

「ごめんなさいね？」 この子こつたら近付く人を問答無用で斬りかかつちやうから……」

そう言いながら楽しそうに微笑んで見せる桃色の髪の少女、この白玉楼の主こと西行寺幽々子^{さいぎょうじゆうけいこ}。

「それが私の仕事です。それより、来客のご予定があるのなら先に言ってくださいよ」

そう言つて少し頬を膨らませた白玉楼の庭師兼護衛である少女、魂^こ妖夢^{ようむ}。

二人に案内されながら椀と葉月は部屋へと案内された。

「では、お茶を用意いたしますので少々お待ちください」

一礼の後、妖夢はそつと部屋を退室した。

「そ、その……突然のご無礼をお許してください……」

姿勢をただした椀は、幽々子と向かいあうと深く深く頭を下げた。葉月も真似して丁寧に頭を下げる。

「いいのよ。私も退屈してたところだし」

「それに、私たちの命まで助けてもらつて……」

「あの場はああでも言わなきゃ妖夢が納得しないもの。あの子は融通が利かないのがちよつと……ねえ？」

ふふつと優しく微笑む幽々子。

そしてその穏やかな瞳が椀と葉月を交互に見てから、

「それで？ この白玉楼になにか御用かしら？」

「えつとその、私たちは今幻想郷を巡っている最中でして、途中訪れた美しい風景を彼女のカメラで撮影したいのですが……」

「へえ……？ なんだか面白そうなことしてるのね？」

続けてとうながす幽々子。

「それである、この白玉楼での撮影許可をいただけませんか？」

「お、お願いします」

椀も葉月も再び頭を下げる。

それに幽々子はにこにこしながら、

「あら、それぐらいお安い御用よ。それじゃあ……あとで妖夢にこの庭を案内させましょうか」

「あ、ありがとうございます！」

三度頭を下げる二人。

「そんなにかしこまらなくてもいいのに」

相変わらずににこしながら幽々子が言うと、戸の外に人の影が現れた。

「幽々子様。お茶のご用意ができました」

妖夢の声だった。

幽々子がどうぞと告げてから、妖夢はゆっくりと戸を開きお茶と菓子をつるまつた。

「ご苦労様。それじゃ、このお茶の後に案内させるわね」

「案内？ なんのお話ですか？」

「うふふ。後でね」

幽々子が菓子をつまみながら悪戯っぽく笑って見せると、妖夢は心底不思議そうな顔になった。

第十七話（後書き）

のほほんとした雰囲気を持ち主、西行寺幽々子。
上手く表現できてるか心配で心配で；
まだまだ修行が足りませんね……

第十八話（前書き）

妖夢に案内された優雅なお庭。

目に映る全てが美しく、とても趣のある庭園。

冥界にいるというのに、葉月はいつしか撮影作業に夢中になっていた。

第十八話

二人が案内されたのは、この白玉楼が誇る広大な庭園。

「うわあ、すごい……」

思わず溜息が出るほどにその庭園は美しかった。

見事なまでに手入れの行き届いた豊かな花や木々。

趣のある、石と砂利で表現された川の風景。

不思議そうに見つめる葉月に、妖夢はそれが枯山水かれさんすいだと丁寧に教えてくれた。

「なんだか芸術的なセンスを感じるなあ……ホントにステキなお庭ですね」

「ありがとうございます葉月さん。そういつていただけると、私も手入れしている甲斐があります」

「このお庭は妖夢さんが手入れしてるの？」

「ええ。それも私の仕事の一つですから」

「他の庭師さんは？」

「このお庭は、全て私一人でお世話してるんです」

「す、すごいなあ……」

庭のあちこちを見渡しながら、葉月はどんなふうに写真を撮影しようか考えていた。

白玉楼をバックに枯山水を収めるか。

それとも、この庭園そのものだけを撮影するか。

いやいや白玉楼だけを大きくバーンとアップで……

「どうしよう……迷っちゃうなあ」

すると、何故か妖夢は少し残念そうにつぶやいた。

「もう少し時期が早ければ、この白玉楼で満開の桜を見ることができたんですが……」

「桜？ 幻想郷にも桜があるの？」

「幻想郷にも……？」

「ああ！？ あ、あれが桜の木ですかね！？」

あまり葉月のことをべらべらと言いつらすのも失礼と思い、桜は適当な木を指差して無理やり話題を反らした。

「……今となつてはもはや枝ばかりですけどね。春になれば、この白玉楼が満開の桜に包まれるんですよ」

「桜かぁ……すごいなあ。私も見てみたかったな……」

「こればかりはさすがに……」

「そ、そうだね……ごめんなさい」

庭を一通り歩き終えた葉月は、早速カメラを用意した。

そして以前のようにあれこれ調節しながらレンズ越しに白玉楼を見つめる。

「……その、桜さん。一つよろしいでしょうか？」

「なんですか？」

必死にカメラを構えたり離したりする葉月を見つめながら妖夢はぼそつとつぶやいた。

「ここはたくさんさんの霊が出入りする場所ですので、もしかしたら撮影したときに他の幽霊が写ってしまうかも……」

「はッ！？ ここが冥界だというのをすっかり忘れて……って葉月さんストップストープ！？」

勢いよく飛び出した桜の後ろ姿を、妖夢は少しだけ笑みを浮かべながら見つめていた。

「……不思議な方たちですね」

庭の真ん中であれやこれやと話し合う妖怪と人間。

そんな光景が、妖夢には不思議と新鮮な光景に見えた。

第十八話（後書き）

もう少して白玉楼編も終了です。

そういえばサブタイトルないのはちょっと地味ですね……
少ししたら付けたそうかな。

第十九話（前書き）

撮影を終えると、椛と葉月は次なる目的地へと旅立つ。

不思議な二人組の後ろ姿が見えなくなるまで、幽々子と妖夢は静かに見送った。

第十九話

「もう、そういうことはもう少し早く教えてほしかったなあ」

「すいません。すっかり忘れてて……」

撮影も終え、二人は縁側で庭園を眺めながらのんびりと休憩していた。

静寂の中、池の鹿威ししおどしが水を流す音だけが小気味よく響いていた。

「この次はどこに行くの？」

「えっと、メモには……っと」

椀が取り出すメモを覗きこむ葉月と幽々子。

……幽々子？

「あら？ もう行ってしまうの？」

「う、わッ！？ 幽々子さんいつの間に！？」

いつの間に現れたのか、椀と葉月の間に幽々子がちよこんと座っていた。

「ついさっき。びっくりさせちゃったかしら？」

「全然気づかなかった……」

「うふふ。それで、あなたたち次はどこへ向かうの？」

椀は気を取り直してメモに目を落とし、読み上げる。

「えっと、次は……太陽の畑と書いてあります。一年中が向日葵に包まれている場所だそうですよ」

「へえ、なんだかステキそうな場所じゃない。今度はそこを撮影するのね？」

「太陽の畑、向日葵……かあ。なんだかすごく楽しみ」

葉月はまだ見ぬ景観を頭の中で思い描き、思わず口元がゆるんでしまった。

「そうですね。では、すぐにでも出発しましょうか」

「あら、じゃあ門の外まで送るわ。妖夢、あなたもこっちにいらっしやいな」

幽々子は渡り廊下を歩いていた妖夢をつかまえると、二人と一緒に門の外へと向かった。

「それじゃ、頑張ってね」

「はい。今回はありがとうございました。では、失礼します」

「えっと、お茶とお菓子美味しかったです。本当にありがとうございました」

仲良くそろって一礼をしてから、二人は白玉楼に背を向けて歩き出した。

「……不思議な方たちでしたね」

門の前で妖夢は、その後ろ姿が見えなくなるまでしばらく見つめて、それから振り返る。

誰もいなくなつた白玉楼の門扉が静かに閉ざされた。

第十九話（後書き）

あけましておめでとうございます。

年末年始はいろいろあつて更新できませんでした；

すいません……

今回は二話連続で投稿します。

第二十話（前書き）

文が小町に引きずられて辿り着いた先は地獄だった。

小町の上司である閻魔、四季映姫の目の前で事の次第を説明させると、映姫は小町に再び指令を出した。

彼女を早急に見つけるように、と……

第二十話

「えっと……それで小町さん？ どうして私がここにいるのでしょうか……？」

「そりやもちろん、映姫様に会ってもらうためさ」

小町に無理やり引きずられて辿り着いたのは地獄だった。

といっても死後の世界というわけではなく、小町の上司である四季^{しき}・
映姫^{えいき}の仕事場。

まっすぐに伸びる廊下の先にそびえる豪華に装飾された扉。

その向こうで、この地獄で最高の権利を持つ裁判長が待っている。
今から閻魔^{えんま}に会うのだ。

そんな状況、妖怪だろうと人間だろうと緊張するものである。

「面倒だから、あんたに事の次第を直接映姫様に説明してもらう。」

その方が手っ取り早いだろう」

「いや、あなたのお仕事はその人間を探すことが先なのだから、つてうわああ!？」

そして小町は豪華な装飾の扉をノックもせずに豪快に開け放つ。

「映姫様、重要参考人を連れてきました」

「小町！ 入る時はノックをしなさいと何度も言ってるでしょう!？」

開けた途端襲いかかる、爆音にも似た大声で二人の耳が一瞬間こえなくなった。

地獄、いや幻想郷全土にまで響き渡りそうなほどの大声の主は、小町を見つけるなりいきなり説教を始めた。

「そもそもあなたは礼儀というものがありません！ 上司の部屋に入るというのにノックもせず、そんなだらけきつた恰好のまま私の部屋に入り、かつなんの連絡も寄越さないまま部外者まで連れてくる！ あなたはそれでも彼岸を担う死神なのですか？ 仕事だつてサボるし渡し賃はばらまくし……つて小町！ 聞いているの！」

？」

「きゃん！？　すみません！？　すみません！？　もうしないから勘弁してください！……！」

それはもう地獄の魔王にひれ伏すがごとく、地面にべったりと土下座する小町の情けない姿。

「……………こ、これは恐ろしいモノを見ちゃいましたね……………」

それでも言い足りないのか、映姫は文のことなど全く気にせずに小町を延々と叱り続けた。

最後のほうは、ほとんど仕事に関係ないようなお説教になっていたが……………」

「……………ごほん。それで重要参考人というのはあなたですか」

「そ、その通りでございます映姫様……………」

瀕死状態の小町が床に突っ伏したまま答えた。

耳にタコができるほど、なんて言葉では到底足りないほどの説教をよくもまあ耐えたものだと言は微妙に関心していた。

「え、えつと……………わ、私は清く正しい射命丸文です。それなので、ええつと……………」

「盗撮に情報漏洩、スパイ活動に器物破損……………と。あなたはいつでも地獄に落ちる準備が出来てるようですね」

「え？　な、なな何なんですか今の！？　私は清く正しく愛らしい真面目な新聞記者ですよ！？　そんな不名誉な罪状なんて知りませんよ！？」

「詐欺も追加、と」

「わゝ！？　わゝ！？　ストップストップ！？」

「そんなくだらないことはさておき」

「……………いや、私には全然くだらなくないんですが……………」

ぜえはあしながらも文は机に向かう映姫をしつかりと見据えた。

片側だけ少し長めの、深い緑のショートヘア。

文様の入った衣服にスカート、装飾の施された大きめの帽子をかぶ

っている。

どうやら書類をまとめている最中だったようで、机の上にはいくつか書類が散乱していた。

なんの書類かはわからないが、恐らくは死者のデータかなにかだろう。

「それでは、彼女のことであつてることを全て話してください。洗いざらい全てです」

「は、はい。えと、なにから話したらよいのやら……そう、あれは今をさかのぼること」

「要点だけで結構ですので、手短にお願いします」

「は、はい……」

映姫の圧力に気圧されつつも、文は手帳を取り出して丁寧語りだした。

「……わかりました。もう下がっていいです」

ひとしきり話を聞き終えると、映姫は小さく息をついた。

「え、いいんですか映姫様？」

「いえ、あなたにはまだ言いたいことがあります。下がっていいのはその射命丸のみです」

「……そりゃあんまりですよお」

「で、では失礼しますね!？」

脱兎のごとく部屋を後にする文を見送ると、映姫は急に真剣な表情になって、

「小町」

「は、はい!？」

「……大至急、彼女を連れてきてください。手遅れになる前に」

「え……は、はい……?」

小町は丁寧に一礼をしてから、文と同く逃げるようにして部屋を出ていった。

もちろん、扉をちゃんと閉めてから。

一人になった映姫は背もたれに寄りかかって天井を見上げた。

「彼女は今、生と死の間で揺らいでいる。生きるか死ぬか……」
目元の疲れをほぐすように手で押さえながら、

「さて、仕事仕事……と」

机上で散乱する書類を手元を集めると、映姫は再び作業に取りかかった。

第二十話（後書き）

そろそろ次の作品のことも考えないとですね。

また二次創作するのもいいけど、今度は普通にファンタジー系を創作しようかな。

もしもまた東方を書くのであれば、今度はオリジナルで「〴〵する程度の能力」を持ったキャラを書いてみたいです。

第二十一話（前書き）

一面に広がる向日葵の中。

ティータイムの最中、少女は二人の気配を感じた。

そうとも知らず、葉月は栞との思い出としてツーショット写真を撮っていた。

第二十一話

太陽の光をいっぱい浴びて輝く、色鮮やかな黄色の絨毯。空を転々と流れる、大小さまざまな雲。

それはまるで、真夏の日のワンシーンを切り取ったようにとても爽やかな景色。

「今日も良い天気ね」

その向日葵の中に包まれながら、優雅に紅茶をたしなむ一人の少女の姿があつた。

若葉色のセミロングの髪に、赤いチェック柄のスカート。

少女は静かに瞳を閉じて口元にカップを近づけると、香りを楽しむようにゆっくりと一口つける。

「……………こんなステキな時間を楽しんでいる最中なのに、一体どれかしら…………？」

微かに感じる二つの気配。

誰かがこの太陽の焔に侵入したらしい。

気配は妖怪と…………もう一つ。

少女が今いる場所の遙か南の方から、少しずつだがこちらに近付いている。

「さて、どうしたものかしら？　あまり派手に動いては花に傷をつけてしまうし…………」

まわりに咲き誇る満開の向日葵を一瞥してから、

「…………とりあえず、私も出向いてみようかしら」

カップを片づけ少女は立ち上がると、日傘をさしながら向日葵の道を歩き出した。

「すごい！　すごい！　一面向日葵だらけだよ！」

「葉月さんったら、そんなにはしゃいだら危ないですよ」

太陽の畑に辿り着いた途端、葉月のテンションが最高潮に達した。右を見ても左を見ても、前も後ろも、視界全てが黄色に染まっている光景。

「こんな景色初めて見たよ。幻想郷ってホントにすごいね！」

「ふふ。それよりカメラはいいんですか？　今は誰もいないから自由に撮影できますよ？」

「あ、うん。そうだね」

そしていつものようにカメラを構える葉月。

あつちを向いたりこつちを向いたり、相変わらず忙しそうな様子。それを見て柊は微笑んだ。

葉月は幻想郷を思いつき楽しんでる。

先輩に命令された時はどうなることかと不安だったが、今となっては柊自身も楽しく思っている。

葉月とこのまま幻想郷中と一緒に巡れたら、もしかしたらもつと楽しいのではないだろうか？

一緒に飛んで、一緒に笑って、この幻想郷の全てを葉月と歩いて……

「一緒に……か」

こんな気持ちになったのは初めてだった。

彼女と一緒にいたせいか、自分の中の何かが少し変わったのかもしれない。

思わず口元がほころぶ。

「柊さん！」

遠くで名を呼ぶ葉月の声。

ふと顔をあげると、葉月が大きく手を振って柊が来るのを待っている。

「いまいきま〜す」

柊は手を振って答えると葉月の方へ向かって走り出す。

「どうかしましたか？」

なぜか葉月は少し照れくさそうに頬を染めながらうつむいて、

「あ、あの……一緒に写真撮りませんか？」

「一緒に撮影ってことですか？ いいですよ。それぐらいお安い御用で」

「ち、違うんです。その……」

「その……？」

首をかしげる椀に、葉月はしっかりと目を合わせて、

「一緒に写真に、ってことです。私と椀さんのツーショットで写真を撮ろうかなと……」

椀は突然真顔になって、

「わ、私は全然美しくなんかありませんよ？」

「もう！ そーじゃなくて！」

そして葉月は椀のそばに寄ると、手に持ったカメラを大きく掲げて、

「はい、椀さん笑って！」

「え、は、はい！？」

椀は言われるがまま、ぎこちない動作で笑ってみせた。

小さな音がして、それから葉月はカメラを下げた。

「ははッ。椀さん変な顔になってるよ？」

「突然笑ってだなんて無理ですよ……もう」

画面に映った二人の表情。

とても幸せそうに笑う葉月と、少々緊張して強ばった顔の椀。

互いの顔を見てから、二人は一面に咲き乱れる向日葵のように明るく、笑いあった。

第二十一話（後書き）

次のお話を考え中です。

オリジナルのキャラの案はあるけど話の案がないもので……；

第二十二話（前書き）

うつそうと茂る向日葵を抜けて、二人は小さな池に辿り着く。
歩き疲れた足を休ませていると、いつのまにか日傘をさした少女が
立っていた。

ただならぬ殺気を感じた椀は、葉月を連れて無言のまま太陽の畑を
逃げるように去っていった。

第二十二話

写真を撮り終わると、二人は再び向日葵の中を歩きだした。

少しずつ奥へ奥へと進んでいくが、行けども行けども向日葵だけしか見えてこない。

最初は楽しそうにしていた葉月も、進むにつれてだんだんと表情が曇りはじめて、

「どこまで向日葵なんだろう……」

「全然終わりが見えませんね……建物も、妖怪も何も見当たりませんし」

「……もしかして、迷子になったのかな？」

「そ、そんなことないですよ。帰り道ならさっききた道を引き返せば……」

そしておもむろに振り向いた椀。

見えるのは向日葵と、向日葵と、向日葵と……

「……あれ？ 私たちどこから来たんでしたっけ？」

「え、ええ！？ も、椀さんわからないの！？」

椀は申し訳なさそうにつつむいて、

「す、すみません……で、でも帰りも私と飛んで帰れば大丈夫ですよ」

「あ。そ、そっか。はあ……一瞬本気で迷子になったのかと思ったよ……」

ホッと胸をなでおろす葉月と椀。

そして再び歩き出す。

しかし一向に景色は変わらない。

ただ延々と、向日葵の道が続いている。

……と、椀はあることを思いついた。

「そっだ。私が飛んで進むべき道を探せばいいんですよ。それなら迷うことはありません」

「ホント？　じゃ、頑張つて椀さん！」

「おまかせください」

椀は低く構えると、空に向かって一直線に飛んだ。

「ここは、えつと……」

眼下に広がる向日葵の世界。

今いるこの場所は、この太陽の畑の真ん中に位置するらしい。

「それなら、このまままっすぐ行けば……？」

少し先に進んだところに小さな池が見えた。

そこまで行けば少しは休めるかもしれない。

「葉月さん。もう少し歩くと開けた場所があります。一度そこで少し休みましょうか」

「そうだね」

地上に降りると椀は方角を確認しつつ、池の方へと向かった。

向日葵畑の真ん中でぽっかりと空いた草原と、澄んだ水を湛えた小さな池。

今の今まで向日葵ばかり見ていた二人にとって、そこはとても安らぐ場所だった。

「さ、さすがに向日葵だけ見てるとちよつと疲れますね……」

「すごくキレイなんだけど、ほら、向日葵って大きいから……」

歩き疲れた足を休ませるため、葉月は靴を脱ぎ捨てて裸足になると恐る恐る池に足を入れる。

「……冷たッ」

透明に透き通った水はとても冷たく、思わず足を離しそうになってしまう。

それでも慣れてしまえばどうということはない。

葉月はそうしてしばらくのんびりと足を休めていた。

空を見上げると、太陽は中天より少し西に傾いていた。

「もう少し休んだら出発しますか？」

「ん。そうだね。次はどんな場所に行けるのかな？」

「ふふ。楽しみにしててください」

「あら……ずいぶんと楽しそうね？」

突然、背後から凜とした声が聞こえた。

振り返ると、そこには日傘をさした少女が静かに微笑んでいた。

「……………何者ですか？ あなた……………」

気配も、音も、全く感じなかった。

それは花が気を抜いていたからか、それとも…………

少女は変わらずにつこりと微笑む。

「ただの、花が好きな女の子…………かしら？」

「女の子…………ですか」

太刀を握る手が震えている。

花は笑顔の少女に恐怖していた。

この人は、いや、こいつは…………

「安心なさい。別に戦う気はないわ。ここで戦えば、花が傷付いてしまうもの」

警戒する花に、少女は諭すように言った。

「えっと、あなたは？」

「名乗るような者ではないわ。それより……………」

「…………？」

少女は赤い瞳で二人を比べるように見てから、

「早くここを立ち去ることね。ここには怖い妖怪がいるから危ないわよ」

「こ、怖い妖怪…………？」

くすくす笑う少女。

どこか、二人をからかっているように、ひどく愉しんでいるようにも見える。

「ど、どうしよう……………花さん。今すぐ出発した方が…………？」

振り返ると、花は険しい表情で少女をにらみつけていた。

まるで威嚇するかのように、瞳を細めてまっすぐに見据えていて…………
「……………今回は見逃す、と？」

「ええ。その子に免じて、かしら。でも、気が変わったら……」
その先は言葉にしなかった。

相変わらず笑顔のまま、静かに二人を見つめている。

「行きましよう。葉月さん」

「あ、う、うん……」

椀はその後無言のまま、一度少女と向かいあって……それから空へと飛んだ。

「ただの雑魚、か。無駄足だったかしらね……」

ひどくつまらなそうにつぶやいた後、少女は向日葵の中へと消えてしまった。

第二十二話（後書き）

名前を出していませんがあの人はです。

こつしてお話を書いていると、よく言葉が浮かばなくて苦労します；
まだまだ勉強が足りないなあ……

第二十三話（前書き）

太陽の畑から飛んで二人は無縁塚に辿り着く。
歩き疲れたせいかわ、葉月はあまり元気がない。
柩は休める場所を探すため、近くを通りかかった紅色の少女に道を
尋ねることにした。

第二十三話

「ここまで来れば大丈夫でしょうか……」

太陽の畑から飛んで、現在二人は無縁塚むえんづかという場所にいた。

文字通り、ここは縁者のいない者の亡骸を葬る場所。

誰も訪れない寂れた墓地に伸びる、深紅に染まる彼岸花。

それはまるで、哀れな死者へ手向けのようにも見える。

「ずいぶんと寂しい場所ですね……」

「ここは無縁塚。この幻想郷に無縁の者が流れ着き、朽ちゆく場所です」

「無縁……？」

「外から迷いこんだ人間、悪しき妖怪の餌食となった者など……あまり気持ちのいい話ではありませんね」

小さな丘を降りると、桜は目の前で咲き誇る彼岸花を指差して、
「でも、彼岸花は綺麗ですよ。ここまでたくさん広がっていると風情があるというか……」

「うん……そうだね」

風に揺れる彼岸花の赤い花弁。

血のように赤い花びらを見てみると、なぜか葉月の心が締めつけられるような気がして……

「どうかしましたか？ 葉月さん？」

「あ、えつと……ちよつと疲れちゃって」

葉月は赤い花からそつと目を反らした。

カメラも、首から下げるだけで触ろうともせず……

「具合でも悪いんですか？ 葉月さん……？」

どこか様子のおかしい葉月に、桜は訝しげな顔になる。

「と、とりあえず移動しましょうか。ここにいても仕方ありませんし」

辺りを見回して、休めそうな場所を探していると、

「……？」

椀の視線の先、誰かがこちらに向かって歩いていく。

紅色の髪に着物姿、そして大きな鎌を背負った少女のようだった。少女はそのまま真っすぐこちらに向かってくる。

「あの人に、どこか休めるような場所がないか聞いてみますか」

椀は少女に向かって足早に歩き出す。

葉月を早く休ませてあげたい。

気がつけば、椀はその少女の元へと走っていた。

「……見つけた」

少女は小さくつぶやくと、背の大鎌に手をかけ、

「えっと、すいませんが近くに休めるような場所など……ッ！？」

椀の言葉はそこで突然途切れた。

少女の背負う大鎌が、一瞬のうちに椀の首筋へと突きつけられた。

「いちいち事情を話す暇はないんだ。さあ、あの女の子はどこだい？」

「い、いきなりなんなんですか！？ あ、あの女の子って……？」

「近くにいるんだろう？ 早く教えないと、アンタの首が胴体とお別れすることになる」

「ッ！？ ……何者です！？」

「小野塚小町。彼岸で死者を送る死神さ。今は任務で、あんたと一緒にいる女の子を連れて来るようにと映姫様から命じられたんだ」

「死神？ それに映姫様って……ッ」

刺すような痛みが椀の思考を止める。

大鎌の刃が、椀の首筋を切りつけ鮮血が流れ落ちる。

「たまにはマジにやらないと怒られるんでね。さあ、さっさと教えな」

「か、彼女は……」

少女の背後に、視線をゆっくりと移すと、誰もいない空間に向かって大声で叫んだ。

「逃げて……！」

「な！？ 後ろって……くそッ！」

小町はそれを疑うことなく振り返り、椀に一瞬の隙を与えた。その一瞬で椀は太刀を下段に構え、すくいあげるようにして小町に斬りかかる。

反応の遅れた小町は大鎌で防ごうとするも対処できず、大鎌は小町の手から吹き飛ばされてしまった。

「しまッ……！！？」

「今のうちに！」

体勢を崩した小町に、さらに椀は体をひねらせ左足で回し蹴りを放つ。

蹴りが直撃した小町は受け身を取れず、そのまま仰向けに倒れてしまった。

「……ちッ、犬妖怪の分際で……って、おい待て！」

顔をあげた時にはすでに椀の姿はなかった。

体を起こし、近くの木の根元にまで転がっていた鎌を拾い上げると、忌々しげにその木を殴りつけた。

「くそッ……次会ったらただじゃおかないよ……」

吐き捨てるようにつぶやいたあと、周囲を見まわしながら再び歩き出した。

殴りつけられた木は、その後メキメキと音を立ててあっさりと倒れてしまった。

第二十三話（後書き）

なぜか小町がものすごく悪役に見える……；

次回も戦闘回になりそうです。

こちらの更新をしつつ、二次創作の新作もちよつとずつ準備してま
すよ。

それと、お気に入り登録してくださった方々、まだ完結はしていま
せんがそれでも評価ポイントをつけてくださった方々、ありがとう
ございます！

第二十四話（前書き）

命からがら、小町から逃げ切った椀。

葉月の身を守るため、無縁塚中を走り回るも葉月の姿は見当たらない。

通り雨が止み、辿り着いた先で、椀は再び小町と対峙する。

第二十四話

小町からなんとか逃げ切ると、栴はすぐさま葉月を探した。

「早く逃げないと……葉月さんが危ない！」

咲き誇る彼岸花の間を風のように走り抜ける栴。

しかし、肝心の葉月の姿が見当たらない。

「こ、こんな時に……葉月さ……ってダメだ。大声で呼んだらあの人に気づかれてしまう……」

姿を潜めつつ、栴は無縁塚を駆ける。

今来た道に戻ってみても、葉月どころか生き物も妖怪すら見当たらない。

仕方なく、栴はいつものように木に飛び移る。

高い場所から見渡せばすぐにでも見つかるはず。

霧の立ち込める無縁塚は幸いそれほど広くはない。

だからすぐに見つかる。栴はそう信じていた。

「……………いない…………？」

見つからない。

見えるのは彼岸花と、粗末な墓標が散らばるだけの殺風景。

人の姿なんて、なかった。

「そんなわけありません！ 千里見通せるこの私が、一人人見つけれられないわけが……」

もう一度、目を凝らして見まわす。

目の前に広がる中途半端な霧が、栴を苛立たせる。

「どうしよう……！？ もし葉月さんに何かあったら私の責任だ……」

うつむく栴を責めるように、空から大粒の雫が降り出した。

気がつけば、どす黒い雲が頭上に広がっていた。

「……早く、見つけないと」

激しく降りしきる雨の中、栴は駆けだした。

もう一度、来た道を戻ろう。

それでもダメなら……

「ダメなら、もう一度走ればいい」

足に泥がはねても、茂る葉に身を切られても、椀は足を止めなかった。

……すると、突然雨が止んだ。

どうやら通り雨だったようで、雲が晴れると綺麗な茜色に染まっていた。

「あ……れ？　ここは……？」

目の前に見知らぬ大きな川が流れている。

茜色に染まった川を見ていると、なぜか無性に寂しさを感じた。

「ここは……」

「三途の川。あたいの仕事場さ」

冷淡な声が背後から響く。

振り返ると、いつの間にか大鎌を構えた小町が立っていた。

椀は驚いて大きく飛びずさると、武器を構えて睨み合う。

「まさかそっちから来てくれるとは思ってなかったよ。教える気になつたのかい？」

「……彼女になにをするつもりなんですか」

「言えないな。それより……」

小町の体から一気に殺気が吹きだす。

先ほどとは打って変わって、真剣な顔つきで椀を見据える。

「ハツタリかますわ、だまし討ちはするわ……山の妖怪つてのは汚いやり口が好きなんかね？　でも、今度はそうはいかないよ。あの

女の子の居場所を吐かせるまで、徹底的にやらせてもらう」

「……ッ」

ぴりぴりと感じる殺気に顔をしかめる椀。

小町は本気で、殺し合いを始めるつもりらしい。

体に伝わる殺気が尋常じゃない。

全身の毛が逆立つのが嫌でもわかる。

「どうしてあんたはあの女の子をかばうのさ。おまえには関わりのないことだろう」

「か、彼女は……」

一呼吸おいてから、椛はキツと小町を見据える。

「彼女は、私の大切な友人です。だから私は、友を守るために、貴女と戦います」

「……友情？ そんな目にも見えないもののために命を投げ売るというのか？ ……滑稽だな」

瞬間。

小町の大鎌が真上から椛に襲いかかってくる。

それを太刀で受け止めるが、全身にのしかかるような重い一撃に椛はあっけなくひざをついてしまった。

「ぐうッ……！？」

「山の警戒程度しかできない妖怪に、あたいが負けるとでも思ってるのか！」

小町は先ほどの椛の動きを真似て、鎌をすくいあげるようにして振り上げる。

大鎌で太刀が吹き飛ばされそうになるが、必死に力を込めてなんとかそれを守る。

たった二度の攻撃。

それだけなのに、椛は全身は震え、肩は大きく上下させていた。

「はんッ。あたいはまだ本気のほの字も出してないってのに、あんたはもうずいぶん辛そうだね」

「はあ、はあ、はあ……わ、私だって、まだ本気を出してませんよ……」

「またお得意のハツタリかい？ 全然そうはみえないけどねえ？」
こうなったら、スベル・カード術符を使うしかない。

椛は一度大きく飛んで距離を取ると、懷から一枚の符を取り出す。
「……！」

それに小町が目を細める。

瞳を閉じ、符に意識を集中させると、桜を中心に光の奔流が溢れだす。

「狗符・レイビーズバイト」

静かにささやくように唱えると、桜を包む光の奔流がその強さを増した。

「白狼の牙、仇名す者を引き裂け！」

桜が腕を伸ばすと、握りしめていた符から強い光が放たれる。

そしてそれは大地を駆ける狼の如く、小町に向かって躍りかかった。

「……なめられたもんだ」

襲いかかる光の牙を前にして、小町は小さくつぶやいた。

おもむろに大鎌を大きく縦に構え、光の奔流に真正面から向かうと、

「はああッ！！」

気合いとともに一閃。

光をまとった狼は、小町を歯牙にかける間もなくあっけなく両断されてしまった。

消えゆく光を見て桜は愕然とした。

「そ、そんな……！？」

「これぐらいの弾幕ぐらい、死神が斬れなくてどうするのさ。さて……」

刹那。

小町が桜に再び大鎌を突きつける。

「抵抗しなさんな。あんたはさつさとあの女の子の居場所を教えればそれでいい」

「……ッ」

「安心しな。正直に言えば命まではとりやせんよ。まあ、あの女の子はどうなるかは知らないが……」

「……」

「……それでも情をとるのかい？ やれやれ変わった妖怪だね……」
無然とした面持ちで、小町はため息をついた。

大鎌の刃を桜の首に押し込むと、低い声音で言ってくる。

「これが最後のチャンスってやつだ。さあ、女の子はどこだい？」

「……」

椀は答えない。

無言のまま、うつむく。

「……………そうかい。じゃあ……………！」

「待つて！」

すると、三途の川に少女のかん高い声が響いた。

椀はハッと顔をあげ、声の方へと振り向く。

紺色の服に肩まで伸びた黒髪。

そして首から下げた、椀をあしらったストラップ付きのカメラ。

夕日を背に少女が一人立っていた。

逆光で表情はハッキリと見えないが、間違いない。

「葉月……………さん!？」

葉月は悲しそうな瞳で、椀ではなく小町を見据えていた。

第二十四話（後書き）

怖い……小町が怖いw

なんていうかものすごく悪役に見える；

むしろこっちの方が死神らしいといえらしいんですけど……

第二十五話（前書き）

窮地に立たされた椀を救ったのは葉月だった。

葉月は椀をかばうため、小町と共に彼岸を渡る。

残された椀と文は、ひとまず妖怪の山へと飛んでいった。

第二十五話

「葉月……それがあんたの名前かい」

「そんなことより、椛さんを放してください！」

小町は椛を一瞥してから葉月に向き合う。

「なら、あたいについてきてはくれないかね？ そうしたらコイツは斬らないさ」

「……わかりました。そちらに行きます。だから椛さんを放して！」
「は、葉月さん……」

大鎌が椛の首筋からゆっくりと離れる。

そして収めると、小町は葉月に近付いてしげしげと見つめた。

「寿命が見えない。あんたで間違いないな」

「え……？ 寿命が見えない？ ど、どういうことですか？ だって葉月さんはただの人間でしょう？」

「ん？ おまえ知らないのか。こいつはな」

小町が口を開きかけた時、どこか遠くの方から轟音が聞こえてきて、
「椛iiiiiiiiiii！」

「へ？ は？ 今先輩の声がつてぎゃあああああ！？」

聞き覚えのある声とともに、音速をも超えるような勢いで椛に何か
が突っ込んできた。

隕石の如く突っ込んだのは文だった。

ぜいぜいと息を荒げて、衝撃で倒れた椛を抱き寄せると、

「も、椛い！？ だ、誰にやられたんだ！？ こんなにボロボロになっ
てなんと哀れな………プフッ」

「八割ぐらいおまえさんのせい………ってかなにこっさり笑ってんだ」

「ああ。気絶してる椛さんが面白い顔をしていてつい」

とか言いながらキチンとシャッターを切る文。

椛はその下敷きになりながら目をぐるぐる回していた。

それを見て、小町は呆れた様子で頭をかきながら、

「……なんかシリアスな空気が台無しになっちゃったね。あんたは大丈夫かい？」

「は、はい……」

葉月に目をやった。

怯えた様子で、時折心配そうに椀の方を見ている。

「そいつなら大丈夫さ。ただ気絶してるだけだし、妖怪なんだから傷はすぐに治る」

「そうですけど……」

「あやや？　もしかして結構良いタイミングで登場しちゃいましたかね？」

「むしろ逆だろ……」

コホンと咳払いをして、小町は気を取り直すと、

「それじゃ、来てくれるな」

「わかりました。行きます……」

葉月を連れて、彼岸を渡ろうと船へと向かう。
乗り込む瞬間、葉月は一度だけ振り向いて文と倒れる椀を一瞥すると、

「……いろいろとありがとうございました」

深く、一礼をした。

「天狗。後のことは任せる。そいつにちゃんと事情を説明してやってくれ」

「あ、いやでも……」

「それじゃ、いくよ」

小町の船が岸を離れる。

茜色の川を、音もなく静かに進む。

そしてだんだんと小さくなる小町の船を、文はその姿が見えなくなるまで見送った。

「……さて、椀にはどう説明したものか……」

椀を抱えると、文はあれこれ考えながら夕日と反対方向に飛んでい

つ
た。

第二十五話（後書き）

次回作……ただいま構想中。

というか、更新の連絡用にツイッターが何か始めようかな……
そういうの、あんまり詳しくないもので：

第二十六話（前書き）

目を覚ますと、桜は見覚えのある部屋で寝ていた。傍で解放するにとりの姿はあるが葉月の姿は無い。にとりを問い詰めるが、その答えは文から告げられた。

第二十六話

「う、うう……ん……？」

目を覚ますと、椛は見覚えのある部屋で寝ていた。

ふと外を見るともう暗く、あれから多少の時間が経過したようだった。

「私、小町さんに負けそうになって、それから……先輩の声が聞こえて……？」

そこから先の記憶がない。

なぜか頭だけ妙にズキズキと痛むのだが……

「お？ 気がついたか椛？」

戸の隙間から、にとりがちよこんと顔をのぞかせた。

そのまま部屋に入ると、椛の真横に座ると、

「にとり……？ っていうかどうして私はここに……？」

「えっとな、椛はさっき文に運ばれてだな。んつと」

「……そうだ。葉月さんは？」

「うんと……その……」

部屋を見回しても、葉月の姿が見当たらない。

もしかして下だろうか？

それなら早く起きないと……

「ッ……！？」

体を起こそうとすると、椛の全身に鈍い痛みが走る。

「無理するなよ。今起きたばっかなんだぞ」

「にとり、葉月さんはどこですか？」

「え？ あいや、そのう……」

気まずそうに目を反らしたにとりの様子に、椛は目を細めた。

椛はすぐさまにとりに掴みかかり、強引に揺さぶるようにして、

「彼女はどこのの？ ねえ、にとり？ ……にとり！？」

「お、落ちて着け椛！？ これには事情があってその……」

「そこからは私が説明します」

すると、いつの間にか文が腕を組みながら戸に寄りかかっていた。

「先輩……？　じ、事情ってなんなんですか？　葉月さんは」

「彼女は、小町さんと彼岸へ向かいました。彼女は……人間ではありませんので」

「……は？」

椀は文の言葉を耳にして、思わず間の抜けた声を出してしまった。唾を飲み込んで、文に向かって訊ねる。

「人間ではないって……いきなりなにを言ってるんですか？　彼女は外界から迷いこんだ人間だって先輩も話を聞いたじゃないですか？」

「外から来た、というのは間違いないようです。ただ彼女の場合……」

そこで文は言葉を止めた。

目を伏せて、椀に事実を言うべきかと一瞬迷う。

逡巡の後、文は顔を上げて椀をまっすぐ見据えた。

普段見せないような真剣な眼差しに、椀は少したじろぐ。

そして、文が口を開いた。

「彼女はもう、死んでいるんです」

「……え………？」

その言葉に、椀の瞳が大きく見開かれた。

第二十六話（後書き）

土日以外とはいえ、さすがに毎日更新するとお話があっという間に進みますね。

まだまだ未熟なお話ですが、最後までお付き合いくださると嬉しいです；

第二十七話（前書き）

葉月という存在について、話をしている小町と映姫。
話が終われば、いつものようにお説教が始まった。
そんな光景をこっそり覗いていた葉月の体に、異変が起こっていた。

第二十七話

「不安定な存在……ですか？」

映姫の事務室で小町は首をかしげていた。

「そう。彼女はとても不安定な存在なのです。幽霊や亡霊とも違う、かといって人間でもない」

「……いまいち意味がわからんのですけど」

映姫は手元の書類を見ながら淡々と答える。

「彼女は外界で自殺を図ったようですね。理由は定かではありませんが……その時抱いていた意思、この場合は未練と言ったほうが正しいでしょうか。それがとても強かったようです。死すらも拒むほどに……」

「自殺つて……」

穏やかではない話に小町が眉をひそめる。

「そして未練を残した魂が彼岸に辿り着き、渡る直前に覚醒したのでしょうか。言わば半人半霊状態でこの幻想郷を彷徨いそして……」

「不安定な存在っていうのは……どういう意味なんですか？」

「……この幻想郷に無縁の者が流れ着いた場合、どうなるか知つてますね？」

頭の中で言葉を探るようにしながら、小町が答える。

「えっと、妖怪のエサになったり、死体はそのまま妖怪になったりするんですよ？」

「彼女もまたこの幻想郷には無縁の者。いつか朽ちゆき、害を成す妖怪となりえる可能性があります」

「いやでも、あの天狗が世話してれば死なないんじゃない？」

映姫の瞳が鋭く細まる。

「どこぞの半人半霊の庭師や商人のそれとは訳が違います。一度死んで生まれた彼女そのものが不安定なのです。いつ何が起きても不思議ではありません」

「突然妖怪になる……とでも？」

「可能性はゼロではありません。それに……」

「それに？」

細い目で、小町を見つめると、

「あなたも含め、これは我々の管轄下での失態です。責任はとりませんと」

「いや、だって急に船を降りるもんだからあたいも思わず呆気にとられちゃって……へへへ」

「笑ってごまかさない！！」

「きゃん！？ すいませんすいませんすいません……」

鼓膜が破れるんじゃないかと思えるほどの声に、小町はただただひれ伏すのみ。

そこからいつものようなお説教が始まって……

「あれが閻魔様……？」

そんな光景を、戸の隙間からこっそり見ていた葉月。

二人のやり取りを見ているだけで体が小刻みに震えだす。

震える体を抑えようと自分の体を両手で抱えようとして、

「……え……？」

葉月は絶句した。

体を抱える腕に、スカートの紺色の生地が透けて見えた。

恐る恐る両腕を見ると、部屋の床も透けて映っている。

気がつくと、葉月の体は半透明にぼんやりと揺らいでいた。

第二十七話（後書き）

まだまだ修行が足りない……；

あ、そうだ。

作品についての後書きは一番最後に書きます。
ですので安心してください（？）

第二十八話（前書き）

葉月の事実を聞かされ、信じられないと激昂する椋。
その真実を自分の目で見るため、傷付いた体を無理やり起こすと、
一人彼岸へと飛んでいった。

第二十八話

「どういうことですか！？ 葉月さんが死んでるって……！ そんなわけじゃないですか！」

文は椀から目を反らすようにして、

「本当のことなんです。小町さんは詳しいことは教えてくれませんでした。彼女は本当に……」

「そんなことはありません！！」

文の言葉を遮るように椀の怒声が部屋中に響いた。

「も、椀……」

なだめようとするにとりの手を振り払うと、椀は無理やり体を起す。

「ッ……！」

「無理するなつて。さっき起きたばかりだろ？」

葉を食いしばって立ち上がると、顔をしかめながら、

「……これくらい、なんともありません。私は今から彼岸へ行きます」

「椀、無駄です。今頃彼女はもう」

「行きますッ！！ 行くとしたら行くんです！！」

枕元に置いてあった太刀と盾を背負うと、乱暴に戸を開け放ってさっさと出ていってしまった。

そのあまりの剣幕に、にとりも文もただ呆然としてしまった。

「椀って、あんなに強引なところもあるんだな……」

「あんな表情初めて見ました……ぜひとも激写するべきでしたね」

「……おまえ、そんな余裕あったか？」

「ぜ、全然……今の椀にそんなことしたら上司とか関係なく容赦なく叩き斬られてたかと」

「……はああ」

たまった息を一気に吐き出すと、にとりも文もその場に仰向けに崩

れた。

そしてそのまま、ぽつぽつとしゃべりだす。

「……どうする？ 放っておくのか？」

「『白狼天狗VS地獄の最高裁判長 その結末やいかに！？』……
なかなか面白そうな記事じゃないですか」

「こんな時にも新聞かい……」

文は立ち上がると、一度服装の乱れを整えてから愛用のメモを取り出す。

そして今度は窓へと向かって、

「善は急げ！ ということで行きますよにとりさん！」

「へ？ 私も？ っておい、そんな急に腕を引っ張るんじゃないなあ
あああ!？」

「レッツ、ゴー！」

にとりの腕を適当に掴むと、文は窓から飛んで椋を追いかけた。

二人が飛び出したときには、幻想郷の空に満点の星々が煌めいていた。

第二十八話（後書き）

今更ですが、このお話地の文が少なくないですか……？
キャラの会話ばかり多くて、風景や心情の描写が少ないような気が
して；

次のお話を書くときには気をつけないとなあ……

第二十九話（前書き）

夜闇に包まれた彼岸。

柁は三度小町と対峙する。

葉月に会うために、柁は太刀を構える。

第二十九話

夜の帳の降りた彼岸。

白い霧がぼんやりと立ち込めるその場所は、先刻とは違い不気味な
雰囲気をかもし出していた。

「……………」

椀の視線の先、棧橋の上。

そこには小町が腕を組みながら静かに仁王立ちしていた。

「……………だいたいの察しはつく。あんた、ここを渡るつもりだろう？」
小さくうなずいて、

「ええ。ですから船を出してください」

椀が答える。

小町はやれやれとため息を一つしてから、見下すように椀を一瞥し
て、

「……………そこですんなり出すと思うのかい？ そうさね……………」

大鎌が月の光に閃く。

満月を背後に小町が椀に突然飛びかかった。

「おまえさんがここで死んでしまうのであれば、お望み通り連れて
行ってやるよ！」

「それはお断りしますッ！」

太刀と大鎌が交差する。

激しい火花を散らしながら、二人の戦闘が始まった。

大鎌を振りながら、小町が叫ぶ。

「そんなに葉月って子が大事なのかい？ おまえさんは妖怪。あの
子は人間。生きる場所も時間も、おまえさんとは途方もないほど
に違い過ぎるというのに！」

「だから何なんです！ 友に、生きる時間も場所も関係ありません
！」

椀の攻撃から逃れるように大きく後退すると、苦い顔をして、

「あの子がすぐに消える結末を知ってもか！」

吠えるようにして小町が叫んだ。

その言葉に、椀が驚き動きを止めてしまった。

「き、消える！？ 葉月さんが……、ッ！？」

一瞬の動揺、その瞬間に襲いかかる刃を椀はすんでのところで受け止める。

たたみかける刃とともに小町は言う。

「あの子はもう、この幻想郷では生きられない。このまま居続けたらやがて朽ち果て、醜態をさらしながら人々に害を成すかもしれない！ それでもおまえは、あの子を留めようというのか！？」

椀は小町を強く見据え答える。

「そ、そんなこと……私が絶対になんとかして見せます！」

「ッ……わっからずやが！！」

強引になぎ払うように鎌を振って椀を吹き飛ばすと、小町は胸元から一枚の符を取り出す。

それは以前椀が使った符と同じ術符。スベルカード

小町を中心に、同じく光の奔流が現れ全身を包む。

しかしその光は、椀のそれを簡単に凌駕してしまうほどに輝き、辺りに凄まじい烈風を巻き起こした。

「ッ……！！？」

「死神の術符。スベルカード その身を以って受けな！」

奔流の強さが途端に強まる。

椀に向かって突き出す両手から、激しい勢いで光弾がほとばしる。

それは散弾のように放射状に大きく広がると、一斉に椀に向かって襲いかかった。

「こんな量の弾幕、防ぎきれるわけ……！？」

大きな爆発とともに、椀は閃光に包まれて見えなくなった。

「プライス・オブ・ライフ。その身で命の重さを思い知ることだね」
この一撃で、決まった。

小町はそう確信して大鎌を背負い、棧橋へ振り返ろうとして……

「……………」

背中に気配を感じてそれを止めた。

「…………ゲホッ、ゲホッ…………ぜ、絶対に…………渡してもらいますよ……………」

椀は太刀を杖のようにして立ち上がると、フラフラしながらもまっすぐ小町を見据える。

しかしその瞳は虚ろに揺れていた。

全身ボロボロで立ち上がることで精一杯なはずなのに、椀は盾を投げ捨て太刀を構える。

「…………哀れなヤツ。おまえさんのためにあたいはここを守っているのだとも知らずに……………」

「はあ、はあ…………絶対に、絶対に葉月さんに……………」
そこで、椀の意識は途切れた。

まるで糸の切れた人形のようにあっけなく倒れてしまった。

「…………ったく、これじゃあたいが一方的に悪役みたいじゃないか」
そして頭をがしがしと乱暴にかいてから息を一つ吐いて、

「あゝあ。また映姫様に叱られるんだろうなあ…………あたい」

自嘲気味に微笑むと、小町は倒れた椀を背負って自分の船へ乗り込んだ。

「椀さん加勢に来ましたよ……………って、あれ？」

文たちが彼岸に辿り着いたころ、彼岸には誰一人いなかった。

第二十九話（後書き）

もう少しで終わります；
完成までしっかり頑張りますね

第三十話（前書き）

白く輝く月とその光に照らされた人影。

気がついた椀が顔をあげると、その人影は先ほどまで戦っていた小町だった。

そして椀は今、三途の川を渡る船の上にいた。

第三十話

目を開けると、白く輝く満月と、その光に照らされている人影が見えた。

人影は無言で、前を見つめながら大きな櫂を操っている。

「どうやら今船の上にいるようだが……」

「ここ……は……?」

か細い声に気づいた人影は、ゆっくりとこちらに振り返って、

「お、気がついたか」

ニツと笑って見せた。

それは先ほどまで戦っていた小町だった。

櫂が慌てて体を起こすと、全身がゆらゆらと揺れだす。

「おっと、急に動くんじゃない。船が揺れて沈んじまうかもしれないだろ?」

「え、え、私どうして船に……? ま、まさか、本当に死んじやつた……!?!」

「はっはは。もしそうだったらあたいと言葉を交わしてないさ」

けらけらと明るく笑いながら小町が答えて、

「おまえさんも変わったヤツだよ。たかが今日会ったばかりの人間にそこまでするなんてね。そんなに気に入った人間なのかい?」

「ええ。すごく魅力的な人ですよ。優しいし、一緒にいるとすごく楽しくて」

「……そうかい」

輝くような櫂の笑顔に、小町は少しだけ目を細めた。

そしてまた黙って櫂を操る。

それからしばらく無言のまま船は進んでいった。

「……そういえば、小町さんはどうして私を運んでくれてるんですか?」

「ん。ただの気まぐれさ。せめて別れの挨拶ぐらいなら映姫様も許

してくれるだろうよ」

「別れの挨拶って、私は葉月さんとお別れするつもりはありませんよ?」

「いや、だからさっき言っただけ……」

振り返ると、椀の瞳がまっすぐ小町を見据えていた。

「……そうかい。もう何も言っまいて。後は自分でなんとか頑張るな」

「はい。そのつもりです」

そして椀は微笑むんだ。

その笑みを見て小町は、

「……哀れなヤツ」

椀に聞こえないよう、小さく呟いた。

そして船は音も立てずに進んでいく。

すると、立ち込める霧の向こうに建物の影が見えた。

ほどなくして船を泊める棧橋も見えた。

小町は櫂を器用に振って棧橋の横に船をつける。

「その、ありがとうございます」

「ああ。気をつけて……な」

椀は小町に丁寧に一礼すると、棧橋に飛び乗って宮殿へと走りだした。

その後ろ姿が見えなくなるまで、小町はただ黙って見送っていた。

第三十話（後書き）

物語の最後を書くのってちょっと苦手で作業が微妙に遅れてます；
今月中には最終話書いて更新できるかな……？
そろそろ新作の方も更新しないと；
ちょっと忙しめです

第三十一話（前書き）

宮殿の中で見つけた装飾の施された不思議な門。

突如現れた映姫は柩に、それが『黄泉の道』への門だと伝える。

葉月はこの先にいる。

柩は門の奥へと走り出した。

第三十一話

華やかな装飾の施された、大きな宮殿。

とても地獄とは思えないほど荘厳で、美しい場所だった。

「この寒気さえなければ、ですけど……」

全身に這い寄るような寒気に、柊は体をぶるぶると震わせていた。それでも柊は葉月を探すためにあちこちを走り回る。

すると、長い廊下の先に同様に装飾された大きな門を見つけた。

なぜかそこからだけは、宮殿全体を包むような寒気を感じなかった。

「えっと、これは一体……？」

「それは『黄泉の道』への門です」

「ッ!？」

突然背後から聞こえた凜とした声に驚いて振り向くと、そこには柊より若干背の低い少女が不思議な棒を持ちながら立っていた。

少女はゆっくりと歩いて、柊に近付きながら、

「外界と地獄を結ぶ道。あなたが探しの人はその先です。本来は通すこと許さないので……」

門の先を指差して言った。

その言葉に柊は不思議そうに首をかしげた。

「……あなたは行かなくてよろしいのですか？」

「え……あ、そうだ！　ぐずぐずしてられない！　し、失礼します！」

そして柊は慌てながら、黄泉の道への門を両手で一気に押し開けると走り出した。

その後ろ姿を少女、映姫は横目で追いかけながら、

「全く。小町ったらこんなに簡単に侵入を許すなんて……帰ってきたら辞表でも書いてもらおうかしら？」

「あ、あんまりだあゝ!？」

つぶやいた独り言に、いつの間にか現れた小町が涙目になりながら反論する。

「あら。戻っていたのですか」

「そ、その、映姫様クビだけはご勘弁を……」

「一応保留ということにしておきます」

「ぐ、ぐぐぐ……」

ふうとため息をついてから、映姫は門に背を向けて歩き出した。

「小町。あの妖怪が戻ってきたら山へと送ってあげてください。それから」

「それから？」

じろりと小町を睨みつけ、

「その後説教です」

「ひ、ひいゝ!？」

冷たく放たれたその言葉に、小町の悲痛な叫びが宮殿中に響き渡った。

第三十一話（後書き）

次のお話が短めなので、明日2話分まとめて更新します
ちよつと遅れるかも……しれません；

第三十二話（前書き）

黄泉の門をくぐると、そこは闇が広がるばかりだった。
光も、風も、何も感じない。

闇の中をあてもなく歩き続けていると、微かな光を前方に見つけた。

第三十二話

そこには闇が広がっていた。

後ろを振り返っても、いつの間にか門は閉ざされていてなにもない。黒い闇だけが漠然と広がっている。

そんな闇の中を、椛は恐る恐るゆっくりと歩く。

一体ここはどこなのだろう。

闇の中。

風も。

気配も。

全く感じない。

椛は少しずつ不安になってきたが、それでも葉月を探すために歩き続けた。

すると前方から、微かな風を感じた。

そしてそれから今度は小さな光が見えた。

光に向かって歩くと、光がだんだんと大きくなっていく。

どうやらちゃんと進んでいるらしい。

安心した椛の足取りが、徐々に速くなって、最後はもうほとんど全力で走っていた。

目の前の光が溢れて、椛を包んで、その眩しさに思わず目をつぶる。

目を開けると、そこは燃えるような夕日に照らされた茜色の世界が広がっていた。

第三十三話（前書き）

黄泉の道。

茜色に染まる世界の中で、桜は葉月を見つける。

振り返る葉月の頬には、茜色に照らされた涙が一筋輝いていた。

第三十三話

茜色の景色がどこまでもどこまでも続いていた。

道も。

空も。

咲き誇る花も。

全てが茜色に染まっていた。

「ここが、黄泉の道……？」

辺りを見まわしていると、なだらかに伸びた道の先で小さな後ろ姿を見つけた。

茜色の世界にぼつんと落ちた紺色の人影。

間違いなく葉月だ。

「葉月さ〜ん！」

柩は大きく手を振りながら声をかける。

人影はほんの少し揺れた後、一度こちらを振り返ろうとして……止めた。

「あ、あれ……？ 聞こえなかったかな……？ お〜い！」

今度は手を振りながら葉月の元へと走った。

葉月にどんどん近付いて、あと少しで触れられそうぐらい近付くと、

「……柩さん」

葉月から、声をかけられた。

そしてゆっくり振り返ると、

「あれ……？ 葉月さん泣いてたんですか？」

葉月の頬に雫が伝っていた。

それは夕日に輝いて、オレンジ色の宝石みたいにキラキラと輝いていた。

「そ、その……ごめんね。何も言わずに勝手に……」

「いいんですよ。私とあなたはもう友達なんですから堅いこと言い

っこ無しです。それより、こんなところにはいないで次の写真を」

「もう、いいよ」

「……え？」

葉月の言葉の意味がわからず、柊は間の抜けた声を出してしまった。そのまま葉月が続ける。

「その、私はもうあの場所にはいられないから……だから、写真はもういいの」

「な、何言ってるんですか！それぐらい私がなんとかしてみせますよ。この幻想郷には凄腕のお医者様もいますし、その気になればにとりさんの発明でも……」

「柊さん、これ見て」

スツと差し出された腕に、柊は目を落とすと、
「……えッ!？」

葉月の体は半透明に透き通って、地面を色を映していた。

「時間がもう……ね。だから私はもう行かな」

「大丈夫です!」

葉月の言葉を遮って、叫ぶように柊が、

「こ、これぐらい全然問題ないですよ！ お金なら私の給金から出しますし、それにお医者様の住んでいる場所も不思議な竹林で、きつと葉月さんも楽しめると思えますから、だから……」

「柊さん……」

声がかすれて、柊は俯く。

「だから、だから……」

柊の声は震えていた。

気がつけば体も震えていて、視界が霞んで……

「だから、お別れなんて……私は……私は……!」

「……柊さんって、けっこう、わがままなところ……あるんだね」

葉月の声も、同じように震えていた。

二人して嗚咽をこらえて、それでも葉月は無理して笑おうとして……
「柊さんに、会えてよかったよ。柊さんに会えてなかったら今頃私

は……」

「嫌です！ そんな、そんな最後のお別れみたいな……言葉……ッ」

「栞……さん」

もう、限界だった。

栞の頬から大粒の涙が滝のようにあふれて、あふれて……

「たった、一日でお別れなんて……そんなの、寂し過ぎますよ……」

「私も……寂しいよ。栞、さん……」

葉月はそつと栞に近付くと、両手で優しく抱きしめた。

この身で感じる確かな温もりが、栞を包みこんで、

「ねえ。離れていても、栞さんは私の友達でいてくれる？」

「……無論です。何があっても、あなたは私の大切な……」

しゃくりをあげながら、栞は葉月をまっすぐ見つめた。

「大切な、友達です……」

その言葉を聞くと、葉月は嬉しそうに微笑んだ。

「ありがとう。栞さん」

そして、葉月の笑顔は茜色の風の中に消えてしまった。

「え……？ 葉月さ……」

もう、声は聞こえない。

温もりも、感じない。

ただ、目の前には空虚な世界が広がっていた。

「……う、うわあああああああ！」

涙が枯れるかと思うぐらい、栞は泣いた。

泣いて、泣いて、泣き続けて、

「……ッ」

乱暴に涙を拭くと、無言のまま立ち上がった。

そして振り返って歩き出そうとした時、ふと足元に何か落ちているのに気がついた。

無造作に拾い上げると、それは葉月のカメラに付いていたストラップだった。

紅葉をあしらった、可愛いストラップ。

柊はそれを強く握りしめると、元来た道へと歩き出した。

……途中、葉月のいた場所を振り返る。

そこにはもう、誰もいなかった。

第三十三話（後書き）

次回、最終回&後書きを更新します。

短いお話だから、やっぱりあっという間に終わっちゃいますね；
では、また明日！

第三十四話（前書き）

あれから月日が少し流れて。

椀がでたらめな見出しにため息ついていると、にとりから将棋の誘いを受けた。

並んで歩く椀の太刀に、にとりは洒落たストラップが付いていることに気がついた。

それは紅葉をあしらった、可愛いストラップだった。

第三十四話

『妖怪の山の侵入者！？ 謎の人物に白狼天狗が迫る！』

でかかとか書かれた新聞の見出しに、椛は大きなため息をついた。

「先輩ったら……結局私は新聞のネタですか……」

記事の内容もろくに見ないで折りたたむと、椛は任務へと戻った。

妖怪の山の哨戒の任、椛に命じられている任務。

高い木の上で、いつものように山の見張りをしていた。

眼下に広がる森の中を監視して、いつでも対処できるようにと意識を集中させていると、

「……もう、この木も枯れ始めちゃいましたね」

足元の木を見つめながら、一人つぶやいた。

ほとんど枝だけの、寂しい木。

その木の枝に腰をかけて、椛はいたわるように触れる。

「おい！ 椛？」

すると、下から聞き慣れた友人の声がした。

覗きこむと、いつものレインコート姿のにとりが木の根元から、

「将棋やるぞー！ 今日はずッタイ負けないからー！」

椛に向かって叫んでいた。

「ええー！ いいですよー！」

それに答えると、すぐさま木を下りる。

「今日こそ私が勝つからな。……あれ？」

「どうかしましたか？にとり？」

にとりは椛の腰の太刀を指差して、

「おまえの剣、そんな洒落たものついてたっけ？」

不思議そうにそう言った。

にとりが指差したものは、椛の太刀の柄に結んであったストラップ。

「これですか？ これは……」

真っ赤に色づいた紅葉をあしらった可愛いストラップ。

一呼吸おいて、

「大切な友達から預かった、忘れ物ですよ」

「……そっか」

寂しそうにつぶやくと、遠い遠い空を見上げた。

幻想郷の秋は、静かに終わりを迎えようとしていた。

） F i n ）

第三十四話（後書き）

紅葉記、最終話。

この次はあとがきです。

く紅葉記 あとがき

このたびは『東方紅葉記』を読んでもういただきまして、ありがとうございました。

こちらのサイトでの執筆は初めてで慣れない部分も多く、大変でしたが何とか書き終えることができました。

閲覧者数が表示される、というのはとても嬉しくて毎日チェックしてました（笑）

閲覧者が伸びれば、読んでくれた人に感謝。

逆に減ってしまえば、ちょっとしょんぼりしたり。

前のサイトでは味わえない緊張感を体験できて楽しかったです。

今回、二次創作の処女作として書き上げた紅葉記、いかがでしたでしょうか？

自分としては……100点中、30点ぐらいの出来だと反省しています；

まだまだ未熟な部分が多くて恥ずかしいかぎりで……

次のお話を書くときには、もう少し上手な文章を書きたいです！

あとがきなのでちょっとだけ元ネタを披露いたします

まず主人公、時雨葉月。

もともと彼女は設定上では『紅葉』という名前でした。

二人の紅葉が、幻想郷を旅して、それから……というのが原案でした。

名の由来は旧暦の八月の『葉月』を拝借しました

続いて祖父、時雨天高。

個人的にすごくカッコいい名前で気に入ってます（笑）

最初は、幻想郷を旅していた写真家で、椀と面識がある、文のカメラの師匠だの、なぜか妙にはっちゃけてた設定のおじいちゃんでした。ちよっと無理やり感が強すぎたので、結局その案はボツとなりましたが……

由来は秋の季語であり、俳句の歌い始めとして有名な『天高し』から取りました

そして二人の姓である『時雨』もまた秋の季語であり、主人公たちは皆秋に関係する言葉を名前に使ってみました。

もう少し、語彙や風景描写が細かく出来たら、東方シリーズの美しい世界観を上手に表現できたのですが……まだまだ修行不足です；

あんましネガティブなコトばっか言ってるもしかたないので、そろそろあとがきを終えようと思います。

読んでくださった皆様。

お気に入り登録や、評価ポイントを入れてくださった方々。

ありがとうございます。

これからも執筆を続けて、いつかステキな小説家になれるよう、頑張ります。

それでは、次回作で会いましょう！

拙い文章でしたが、最後までお付き合いいただき、ありがとうございます。

次回作は……早ければ来週の月曜日にでもupできるかな。
次の作品も、読んでもらえたら嬉しいです。

それでは。

く紅葉記 あとがきく（後書き）

最後までお付き合いいただき、ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3787p/>

東方紅葉記

2011年5月15日04時23分発行